

平成元年度版

三重県こころの健康センター所報
(精神保健センター)

三重県こころの健康センター

はじめに

平成元年度のセンター活動を所報としてまとめましたので、ここにお届け致します。

平成元年度は、新しいセンターでの仕事が始まるとともに、従来の事業の見直しを計り、新しい事業を加えて、事業体制を再編成したという意味で、センターにとっての節目となりました。

センター開設以来三年間継続して開催した精神保健相談員養成講座が終了し、代って、三重県の地域精神保健活動にとって当面の課題と思われるテーマについて、8つの教育研修コースを設けました。また新たに、家族教室や精神保健ボランティア教室を開催し、精神障害者を取り囲む、家族や地域住民の支援機能を高めようという試みを導入してみました。幸い、二つの教室ともそれなりの反響が得られ、各参加者からの生の声がフィードバックされることによって、今後の精神保健活動についての貴重な示唆を頂くことができました。

さらに、「心の健康づくり」に関する連絡会議が持たれるようになりました。心の健康づくり推進事業については、近年の適応障害事例の増加という事態を受けて、それへの対応や予防を計るべく設定されたものですが、平成元年度は、関係機関の実務者レベルで広く情報交換、意見交換を行うことから始めました。

一方、関係機関からの技術援助要請、精神保健相談、協力組織からの援助要請等も年ごとに増加して来ております。追われるように時が過ぎたというのが、職員の偽らざる感想であろうと思います。

また、三重県精神障害者家族連合会の事務局についても、県立高茶屋病院より当センターに移転しました。その背景には、従来の病院家族会が各保健所単位の地域家族会として整理再編されたという事情があります。しかし、まだ家族会の成立しない地域もあり、今後のサポートシステムの推進を考える時、三家連一地域家族会の充実発展が期待されるころであります。

最後になりましたが、センターの活動については、今後とも各方面からの忌憚のない御批判、御指導を賜りたいと存じます。

精神保健の領域は広く、多面的であり、我々の生活のあらゆる側面からの接近が必要であることは中ず道もありません。

微力ながら我々も、三重県の精神保健の向上をめざして、センターの在り方、援助方法、援助の質等について検討を進めて行きたいと存じますので、重ねて御願い申し上げます。

平成3年1月

三重県こころの健康センター
所長 原 田 雅 典

目 次

はじめに

I. こころの健康センター概要	1
1. 沿革	1
2. 業務	1
3. 施設の概要	2
4. 組織及び職員	4
II. こころの健康センターの活動	5
1. こころの健康センター業務	5
(1) 技術指導援助	5
(2) 教育研修	9
(3) 広報啓発及び調査研究	19
(4) 協力組織の育成	29
(5) 精神保健相談	47
III. 事例検討会のあり方をめぐって	57
—アンケート結果から—	57
IV. こころの健康センター図書目録	69

I. こころの健康センター概要

1. 沿 革

2. 業 務

3. 施設の概要

4. 組織及び職員

1. 沿革

○ 昭和61年5月

三重県こころの健康センター（精神保健センター）は精神保健法第7条の規定に基づき、地域精神保健活動の技術的中枢機関として、三重県津庁舎津保健所棟1階（津市桜橋3丁目446-34）に開設され、保健環境部保健予防課の分室としてスタートする。

初代所長 原田雅典氏就任。

精神科医師1名、看護婦1名、保健婦1名、事務職1名、計4名の常勤職員が配置される。他に、電話相談員（嘱託）2名配置される。

○ 昭和62年4月

精神科ソーシャル・ワーカー（PSW）が始めて配置される。

○ 昭和63年10月

三重県久居庁舎（久居市明神町2501-1）の完成に伴い同1階に移転する。

○ 平成元年4月

県の出先機関として独立

心理技術者（CP）が始めて配置される。

2. 業務

当こころの健康センターは、「精神衛生センター運営要領」（衛発第194号厚生省公衆衛生局長通知、昭和44年3月24日）に基づき、次の業務を行っている。管轄は、県下全域である。

(1) 技術指導援助

地域精神保健活動を推進するために、保健所及び関係諸機関に対し、専門的立場から、積極的な技術指導ならびに技術援助を行なう。

(2) 教育研修

保健所で精神保健業務に従事する職員（精神保健担当者、保健婦等）に専門的研修と技術指導を行うほか、関係諸機関の職員には、教育訓練を行い、関係職員の技術的水準の向上を図る。

(3) 広報啓発

一般住民に対する精神保健知識の普及啓発を行うとともに、保健所が行う広報普及

活動に対して専門的立場から指導と援助を与える。

(4) 調査研究

地域精神保健活動を推進するために、必要な精神保健上の諸問題を調査研究するとともに、精神保健に関する統計及び資料を収集整備する。

(5) 協力組織の育成

地域精神保健の向上を図るために、精神医療施設や保健所その他の関係諸機関を単位としてつくられた協力組織の育成を図るとともに、他方、都道府県単位の組織を育成強化することに努め、地域精神保健活動に対する住民の協力参加や各種社会資源の活用を円滑に行う。

(6) 精神保健相談

保健所並びに関係諸機関が取り扱った事例のうち、複雑又は困難なものにつき実施する。また、これらのほか、一般住民の心の健康の保持、向上のために専門的な立場から相談指導を行う。

3. 施設の概要

(1) 所在地

〔昭和61年5月1日～昭和63年10月8日〕

三重県津市桜橋3丁目 446-34 三重県津庁舎保健所棟1階

〔昭和63年10月9日以降〕

三重県久居市明神町2501-1 三重県久居庁舎1階

(2) 施設の状況

〔昭和61年5月1日～昭和63年10月8日〕

三重県津庁舎保健所棟1階 1室 52.9㎡

〔昭和63年10月9日以降〕

三重県久居庁舎1階

	㎡
ア 敷地面積（久居庁舎）	11,617.29
イ 建物面積（本館棟）	延床面積 5,484.50
ウ 建物構造（本館棟）	鉄筋コンクリート造4階建、一部5階建

エ 当センター占有面積 723.0

オ 各室面積

事務室（電話相談室、所長室） 65.2

第1相談室（脳波、心理検査室） 30.8

第2相談室 23.9

第3相談室（診察室） 26.5

図書資料室 37.0

第1デイルーム 140.4

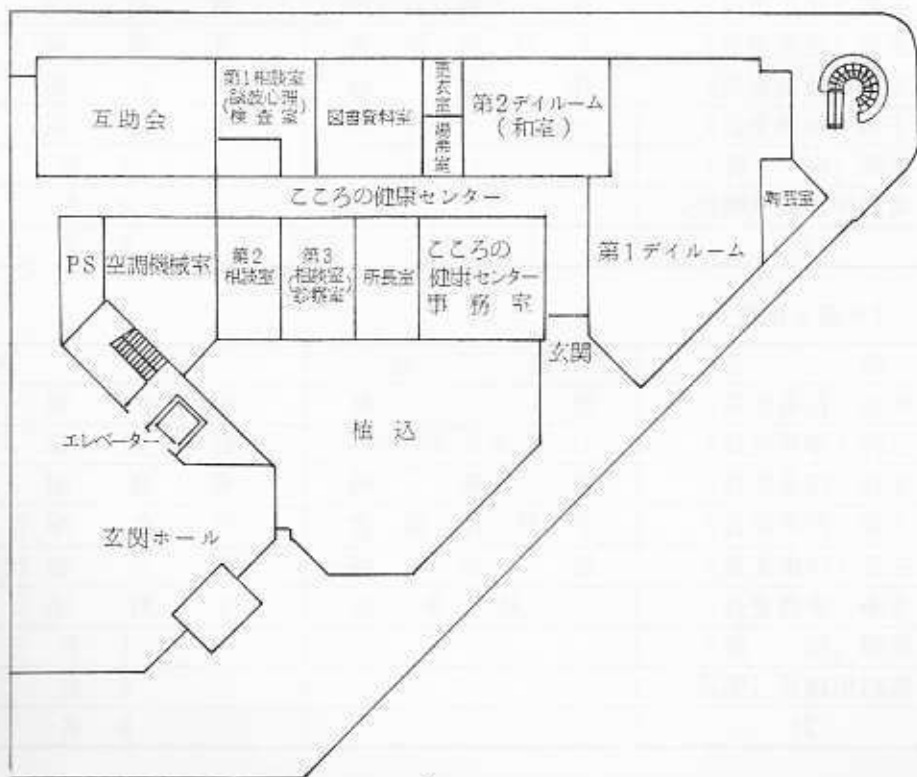
第2デイルーム（和室） 44.8

陶芸室 11.3

更衣室、湯沸室 12.0

各室面積 計 391.9

三重県こころの健康センター平面図



4. 組織及び職員

所掌事務



職員構成
〔平成元年度〕

職名	職種	氏名
所長（技術吏員）	医師	原田 雅典
主幹（事務吏員）	ソーシャルワーカー	萩下 洋一
主幹（技術吏員）	保健婦	青島 昭子
主査（技術吏員）	心理技術者	久保 早百合
主査（技術吏員）	保健婦	河合 加代子
主事（事務吏員）	一般事務	中野 成則
医師（嘱託）		1名
電話相談員（嘱託）		2名
計		9名

〔平成2年度〕

職名	職種	氏名
所長（技術吏員）	医師	原田 雅典
主幹（事務吏員）	ソーシャルワーカー	野里 知巳
主幹（技術吏員）	保健婦	青島 昭子
主査（技術吏員）	心理技術者	久保 早百合
主査（技術吏員）	保健婦	河合 加代子
主事（事務吏員）	一般事務	中野 成則
医師（嘱託）		1名
電話相談員（嘱託）		2名
計		9名

Ⅱ. こころの健康センターの活動

1. こころの健康センター業務

- (1) 技術指導援助
- (2) 教育研修
- (3) 広報啓発及び調査研究
- (4) 協力組織の育成
- (5) 精神保健相談

(1) 技術指導援助

年度	技術指導援助		技術指導援助				技術指導援助	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
昭和27年度	1	100,000	2	200,000	3	300,000	4	400,000
昭和28年度	2	200,000	3	300,000	4	400,000	5	500,000
昭和29年度	3	300,000	4	400,000	5	500,000	6	600,000
昭和30年度	4	400,000	5	500,000	6	600,000	7	700,000
昭和31年度	5	500,000	6	600,000	7	700,000	8	800,000
昭和32年度	6	600,000	7	700,000	8	800,000	9	900,000
昭和33年度	7	700,000	8	800,000	9	900,000	10	1,000,000
昭和34年度	8	800,000	9	900,000	10	1,000,000	11	1,100,000
昭和35年度	9	900,000	10	1,000,000	11	1,100,000	12	1,200,000
昭和36年度	10	1,000,000	11	1,100,000	12	1,200,000	13	1,300,000
昭和37年度	11	1,100,000	12	1,200,000	13	1,300,000	14	1,400,000
昭和38年度	12	1,200,000	13	1,300,000	14	1,400,000	15	1,500,000
昭和39年度	13	1,300,000	14	1,400,000	15	1,500,000	16	1,600,000
昭和40年度	14	1,400,000	15	1,500,000	16	1,600,000	17	1,700,000
昭和41年度	15	1,500,000	16	1,600,000	17	1,700,000	18	1,800,000
昭和42年度	16	1,600,000	17	1,700,000	18	1,800,000	19	1,900,000
昭和43年度	17	1,700,000	18	1,800,000	19	1,900,000	20	2,000,000
昭和44年度	18	1,800,000	19	1,900,000	20	2,000,000	21	2,100,000
昭和45年度	19	1,900,000	20	2,000,000	21	2,100,000	22	2,200,000
昭和46年度	20	2,000,000	21	2,100,000	22	2,200,000	23	2,300,000
昭和47年度	21	2,100,000	22	2,200,000	23	2,300,000	24	2,400,000
昭和48年度	22	2,200,000	23	2,300,000	24	2,400,000	25	2,500,000
昭和49年度	23	2,300,000	24	2,400,000	25	2,500,000	26	2,600,000
昭和50年度	24	2,400,000	25	2,500,000	26	2,600,000	27	2,700,000
昭和51年度	25	2,500,000	26	2,600,000	27	2,700,000	28	2,800,000
昭和52年度	26	2,600,000	27	2,700,000	28	2,800,000	29	2,900,000
昭和53年度	27	2,700,000	28	2,800,000	29	2,900,000	30	3,000,000
昭和54年度	28	2,800,000	29	2,900,000	30	3,000,000	31	3,100,000
昭和55年度	29	2,900,000	30	3,000,000	31	3,100,000	32	3,200,000
昭和56年度	30	3,000,000	31	3,100,000	32	3,200,000	33	3,300,000
昭和57年度	31	3,100,000	32	3,200,000	33	3,300,000	34	3,400,000
昭和58年度	32	3,200,000	33	3,300,000	34	3,400,000	35	3,500,000
昭和59年度	33	3,300,000	34	3,400,000	35	3,500,000	36	3,600,000
昭和60年度	34	3,400,000	35	3,500,000	36	3,600,000	37	3,700,000
昭和61年度	35	3,500,000	36	3,600,000	37	3,700,000	38	3,800,000
昭和62年度	36	3,600,000	37	3,700,000	38	3,800,000	39	3,900,000
昭和63年度	37	3,700,000	38	3,800,000	39	3,900,000	40	4,000,000
昭和64年度	38	3,800,000	39	3,900,000	40	4,000,000	41	4,100,000
昭和65年度	39	3,900,000	40	4,000,000	41	4,100,000	42	4,200,000
昭和66年度	40	4,000,000	41	4,100,000	42	4,200,000	43	4,300,000
昭和67年度	41	4,100,000	42	4,200,000	43	4,300,000	44	4,400,000
昭和68年度	42	4,200,000	43	4,300,000	44	4,400,000	45	4,500,000
昭和69年度	43	4,300,000	44	4,400,000	45	4,500,000	46	4,600,000
昭和70年度	44	4,400,000	45	4,500,000	46	4,600,000	47	4,700,000
昭和71年度	45	4,500,000	46	4,600,000	47	4,700,000	48	4,800,000
昭和72年度	46	4,600,000	47	4,700,000	48	4,800,000	49	4,900,000
昭和73年度	47	4,700,000	48	4,800,000	49	4,900,000	50	5,000,000
昭和74年度	48	4,800,000	49	4,900,000	50	5,000,000	51	5,100,000
昭和75年度	49	4,900,000	50	5,000,000	51	5,100,000	52	5,200,000
昭和76年度	50	5,000,000	51	5,100,000	52	5,200,000	53	5,300,000
昭和77年度	51	5,100,000	52	5,200,000	53	5,300,000	54	5,400,000
昭和78年度	52	5,200,000	53	5,300,000	54	5,400,000	55	5,500,000
昭和79年度	53	5,300,000	54	5,400,000	55	5,500,000	56	5,600,000
昭和80年度	54	5,400,000	55	5,500,000	56	5,600,000	57	5,700,000
昭和81年度	55	5,500,000	56	5,600,000	57	5,700,000	58	5,800,000
昭和82年度	56	5,600,000	57	5,700,000	58	5,800,000	59	5,900,000
昭和83年度	57	5,700,000	58	5,800,000	59	5,900,000	60	6,000,000
昭和84年度	58	5,800,000	59	5,900,000	60	6,000,000	61	6,100,000
昭和85年度	59	5,900,000	60	6,000,000	61	6,100,000	62	6,200,000
昭和86年度	60	6,000,000	61	6,100,000	62	6,200,000	63	6,300,000
昭和87年度	61	6,100,000	62	6,200,000	63	6,300,000	64	6,400,000
昭和88年度	62	6,200,000	63	6,300,000	64	6,400,000	65	6,500,000
昭和89年度	63	6,300,000	64	6,400,000	65	6,500,000	66	6,600,000
昭和90年度	64	6,400,000	65	6,500,000	66	6,600,000	67	6,700,000
昭和91年度	65	6,500,000	66	6,600,000	67	6,700,000	68	6,800,000
昭和92年度	66	6,600,000	67	6,700,000	68	6,800,000	69	6,900,000
昭和93年度	67	6,700,000	68	6,800,000	69	6,900,000	70	7,000,000
昭和94年度	68	6,800,000	69	6,900,000	70	7,000,000	71	7,100,000
昭和95年度	69	6,900,000	70	7,000,000	71	7,100,000	72	7,200,000
昭和96年度	70	7,000,000	71	7,100,000	72	7,200,000	73	7,300,000
昭和97年度	71	7,100,000	72	7,200,000	73	7,300,000	74	7,400,000
昭和98年度	72	7,200,000	73	7,300,000	74	7,400,000	75	7,500,000
昭和99年度	73	7,300,000	74	7,400,000	75	7,500,000	76	7,600,000
平成元年度	74	7,400,000	75	7,500,000	76	7,600,000	77	7,700,000
平成2年度	75	7,500,000	76	7,600,000	77	7,700,000	78	7,800,000
平成3年度	76	7,600,000	77	7,700,000	78	7,800,000	79	7,900,000
平成4年度	77	7,700,000	78	7,800,000	79	7,900,000	80	8,000,000
平成5年度	78	7,800,000	79	7,900,000	80	8,000,000	81	8,100,000
平成6年度	79	7,900,000	80	8,000,000	81	8,100,000	82	8,200,000
平成7年度	80	8,000,000	81	8,100,000	82	8,200,000	83	8,300,000
平成8年度	81	8,100,000	82	8,200,000	83	8,300,000	84	8,400,000
平成9年度	82	8,200,000	83	8,300,000	84	8,400,000	85	8,500,000
平成10年度	83	8,300,000	84	8,400,000	85	8,500,000	86	8,600,000
平成11年度	84	8,400,000	85	8,500,000	86	8,600,000	87	8,700,000
平成12年度	85	8,500,000	86	8,600,000	87	8,700,000	88	8,800,000
平成13年度	86	8,600,000	87	8,700,000	88	8,800,000	89	8,900,000
平成14年度	87	8,700,000	88	8,800,000	89	8,900,000	90	9,000,000
平成15年度	88	8,800,000	89	8,900,000	90	9,000,000	91	9,100,000
平成16年度	89	8,900,000	90	9,000,000	91	9,100,000	92	9,200,000
平成17年度	90	9,000,000	91	9,100,000	92	9,200,000	93	9,300,000
平成18年度	91	9,100,000	92	9,200,000	93	9,300,000	94	9,400,000
平成19年度	92	9,200,000	93	9,300,000	94	9,400,000	95	9,500,000
平成20年度	93	9,300,000	94	9,400,000	95	9,500,000	96	9,600,000
平成21年度	94	9,400,000	95	9,500,000	96	9,600,000	97	9,700,000
平成22年度	95	9,500,000	96	9,600,000	97	9,700,000	98	9,800,000
平成23年度	96	9,600,000	97	9,700,000	98	9,800,000	99	9,900,000
平成24年度	97	9,700,000	98	9,800,000	99	9,900,000	100	10,000,000

当センターでは地域における精神保健活動を推進するために、保健所及び関係諸機関に対し、専門的立場から技術指導援助を行っている。

平成元年度は、保健予防課の分室から独立して、各事業の範囲を拡大し、領域、職域を広げて行ったこと、心理技術者1名の増員、関係機関のセンターに対する理解が増したこと等により、関係機関への技術援助回数が増加した。技術指導援助も今まで保健所が多数をしめていたが、元年度では、他関係機関へと広がってきており、その割合は、6：4となっている。平成元年度の技術指導援助の回数は総計256回であり、昭和63年度の175回と比べると146%であり、約5割増となっている。

この内、保健所に対する技術指導援助は161回である。

表1. 平成元年度 保健所への技術指導援助実施状況

保健所	実施回数	参加対象者延数	技術指導援助回数					指導内訳		
			医師	ソーシャルワーカー	保健婦A	心理技術者	保健婦B	事例検討会	デイケア	その他
桑名	5回	55名	4回	1回	1回	2回	2回	5回	回	回
四日市	28	447	7	5	11	7	8	6	20	2
鈴鹿	18	126	4	2	5	8	4	3	5	10
津	10	122	5	2	2	6	3	4	4	2
久居	9	54	6	1	1	3	2	4		5
松阪	19	120	6	3	4	3	8	4	5	10
伊勢	16	135	4	5	3	4	6	4	6	6
志摩	5	69	3	2	1	2	2	5		
上野	31	490	2	3	7	10	12	3	25	3
尾鷲	12	66	6	2	6	2	2	7		5
熊野	8	53	3	2	2	2	2	5		3
合計	161	1737	50	28	43	49	51	50	65	46

その内容は事例検討会、デイケア、電話コンサルテーションが主なものである。

表2. 平成元年度 事例検討会の事例名

保健所名	実施月日	事 例
桑名保健所	H元. 5. 22	精神障害があり育児に問題のある母親への処遇について
	〃	保育園長への関係妄想をもつE子とのかかわり
	H元. 6. 12	境界型人格障害者の両親への支援
	〃	問題行動のために両親から身捨てられたHさん
	H元. 9. 13	摂食行動の異常を長期間持続しているTさんへの支援
	H 2. 1. 29	よりどころを求めながらも自己主張のできないケース
	〃	育児に自信がもてず、不安が強い産後うつ病の母親
四日市保健所	H 2. 3. 19	精神発達障害児をもつM子への支援
	〃	精神病の母をもつ、精神発達障害児に対する関係機関のかかわり方
	H元. 6. 8	近隣への迷惑行為を繰り返す中年女性へのかかわり
	H元. 8. 10	妻に見離されたアルコール依存者への受診勧奨
	H元. 10. 12	老年性痴呆の疑いがもたれるケースの妻への支援
鈴鹿保健所	H元. 12. 14	身体症状を多く訴えるA子への対応
	H 2. 2. 8	心因性下痢症状を訴えるテンガンの男性
	H元. 7. 6	自己中心的で相互交流のもてないケースにかかわって
	H元. 10. 5	「私を見捨てないで」と訴えるケース
津保健所	〃	長女の場面緘黙症により、自信を失った母親
	H 2. 2. 1	障害児をもつ非定型精神障害の母親へのかかわり
	H元. 5. 2	老人性うつ病のケースをもつ家族への援助
	H元. 7. 4	むちうち症の症状を訴え就労に結びつかないケースの援助 パートⅡ
	〃	両親の不安定な関係の中で揺れ動くA子
久居保健所	H元. 11. 7	現実を認めたがらない母親とのかかわり
	〃	デイケアに参加すると状態が悪くなるケースの家族への支援
	H 2. 3. 6	依存心の強いケースに対する援助
	H元. 4. 18	アルコール依存症のために迷惑行為を繰り返すあるアルコール症者
松阪保健所	H元. 6. 20	一過性のヒステリー症状を示す老母をもつ家族への対応
	H 2. 2. 20	各関係機関の連携により、ささえられる中年女性
	H元. 5. 15	O男の異常を認めない家族と支援を求める母親へのかかわり
	H元. 10. 24	父の無理解で治療が中断した精神分裂病者
	〃	被害妄想を訴えるケースへの受診勧奨
伊勢保健所	〃	母親の影響が大きい人格障害のA君
	H 2. 2. 26	キーパーソンがいないケースの地域でのかかわり
	〃	通院を続けるケースB君の就労への支援
伊勢保健所	H元. 6. 6	不安が強く訴えの多いケースをめぐって
	H元. 10. 3	家族のいないケースへの退院後の関係機関の支援…パートⅠ

保健所名	実施月日	事例
伊勢保健所	H元. 12. 5	双子の分裂病者をかかえた疾病への理解のない家族へのアプローチ 家族のいないケースへの退院後の関係機関の支援…パートII
	H 2. 2. 6	
志摩保健所	H元. 6. 1	病識のないアルコール依存症Aさんとのかかわりの中で アルコール依存症者への訪問活動 障害児をもつ母親への受容的援助 衝動行為・情緒不安定のあるケースとのかかわり
	H元. 8. 3	
	H元. 10. 5	
	H元. 12. 7	
上野保健所	H元. 7. 31	服薬を拒む精神分裂病Oさんへの対応 育児ノイローゼが心配される母親への援助 経済的な理由から治療を中断したBさん 関係機関の援助により地域で生活する分裂病の女性のケース
	H元. 9. 21	
	H元. 11. 30	
	H 2. 1. 24	
熊野保健所	H元. 5. 15	ボケを夫にもつ老いた妻への援助 性に異常な関心を示すN男さんとのかかわり 高令でボケ症状を呈するケースの家族への支援 人格障害ケースへの受診勧奨 アルコール依存症Y氏への退院後の支援
	H元. 7. 17	
	〃	
	H 2. 3. 19	
〃	〃	

また他関係機関に対しては、その要請に応じて研修会の講義・講演やケースコンサルテーションを行っているが、援助回数も、昭和63年度の51回から、元年度は95回であり、8割も多くなっている。

表3. 平成元年度 関係機関への技術指導援助

関係機関	実施回数	職種別援助回数				援助内容		備考
		医師(1名)	ソーシャルワーカー(1名)	保健婦(2名)	心理技術者(1名)	ケース援助	職員精神保健指導	
福祉機関	22	4	2	5	11	18	4	
医療機関	4		1	1	2	3	1	
行政機関	18	7	3	9		1	17	
教育機関	9		2	4	3	9		
市町村	21	6		12	3	18	3	
学生教育実習	9	6	1	7			9	
その他	12	4		5	2	7	5	労働5 司法2 団体1 総名4
合計	95	27	9	43	21	56	39	

国の「精神保健センター運営要領」によれば「保健所で精神保健業務に従事する職員（精神保健相談員、精神科ソーシャルワーカー、保健婦、看護婦等）には専門的研修と技術指導を行うほか、関係諸機関の職員には教育訓練を行い、関係職員の技術的水準の向上を図る。」と定められている。

昭和61年5月に当センターが開設されて以来主に保健衛生関係機関の職員を中心に時宜に即したテーマを選び研修を実施して来た。開設以来、県の保健予防課分室の三年を経て平成元年4月1日付けて県の出先機関としてスタートし、三重県に於ける精神保健の向上を図る総合的な技術中枢機関としての立場から昨年度までの三本柱の研修から、ライフサイクルに添った形での研修を加え七本柱とし、更に地域で実施される社会復帰指導相談事業の中の一つデイ・ケアを担当する指導者を養成する社会復帰指導者研修会を加え、計八本の柱とした。福祉、教育、医療、労働、司法等とし、精神保健の推進のため関連ある機関との連携も教育研修を機として深めたいと願っている。又、センターの整備に伴い見学、実習等も増加し、その実施状況は表1の通りである。

又、各々の教育研修については後に詳しく述べる。

表1. 平成元年度教育研修実施実績

ア. 研修会

教育研修名	実施日	受講対象	受講者数
精神保健担当者研修会	平成元年4月20日（木）	県福祉事務所、保健所の担当者	23名
精神保健事例検討会	平成元年6月29日（木）	保健所の関係職員	23
	8月1日（火）	高等学校関係者	27
	10月31日（火）	保健所の関係職員	25
	平成2年2月21日（水）	県、市町村の福祉関係者	25
児童精神保健研修会	平成元年7月14日（金）	福祉、教育、医療、市町村保健所等の関係者	103
	平成2年2月13日（火）	保育所、母子推進員、市町村看護協会、保健所等の関係者	239

教育研修名	実施日	受講対象	受講者数
酒害保健研修会	平成元年9月26日(火)	福祉、事業所、市町村、保健所等の関係者	61
地域精神保健研修会	平成2年1月30日(火)	福祉、病院、教育、市町村、労働、家族会、作業所、保健所等の関係者	154
老人精神保健研修会	平成2年3月7日(水)	福祉(社協も含む)病院、施設、市町村、保健所の関係者	173
精神保健相談員継続研修会	平成2年3月7日(水) 3月8日(木)	精神保健相談員 (保健所保健婦有資格者)	42
社会復帰指導者研修会	平成元年7月～ 平成2年3月 毎月曜日、年33回	保健所精神保健担当者	121

計 1,016 名

イ、学生教育、実習など

受講者名	実施回数	受講者数
国際交流イアッツフォーラム タイ国研修生	1回	10名
三重大学精神々経科新入局員他	2回	17
看護学校学生(三校)	3回	12
三重大学医学部学部2年生他	3回	107
その他	2回	13

計 159名

(ア) 精神保健担当者研修会

精神保健の基礎知識、法の運用について研修し、精神保健、福祉事業の推進に寄与する事を目的とする。

日 程	内 容
平成元年4月20日(木) 10:00~15:30	I. こころの健康センター事業の紹介 II. 講義 ① 精神保健相談をめぐる法的問題 こころの健康センター所長 原田 雅典 ② 精神保健相談のすゝめ方 こころの健康センター主幹 萩下 洋一 ③ 精神障害者の地域ケア こころの健康センター主幹 青島 昭子

(イ) 精神保健事例検討会

第一回(保健所関係)

保健所における地域精神保健活動について今後の方向性を思索し職員の資質の向上を図ると共に事業の推進に寄与することを目的とする。

日 程	内 容
平成元年6月29日(木) 10:00~15:00	事例名 「かゝわって10日間で死亡したケース」 事例提供者 熊野保健所保健婦 中谷まゆみ 助言者 こころの健康センター所長 原田 雅典

第二回（教育関係）

不登校の事例を通して高校生の持つ問題を知り、学校保健における精神保健活動のあり方について考える。

日 程	内 容
平成元年8月1日（火） 13:00～16:00	事例名 「登校拒否」 事例提供者 県立津商業高等学校教諭 長谷川 静雄 助言者 小児心療センターあすなる学園医長 小西 真行

第三回（保健所関係）

日 程	内 容
平成元年10月31日（土） 10:00～15:00	事例名 「受診に消極的な精神分裂病患者」 事例提供者 尾鷲保健所保健婦 寺添千恵子 助言者 こころの健康センター所長 原田 雅典

第四回（福祉関係）

福祉分野における地域精神保健活動について事例を通して今後の方向性を思索し、関連期間との連携のもとに事業の推進を図る。

日 程	内 容
平成2年2月21日(水) 13:00~15:30	事例名 「成育歴に問題のある高校生への援助」 事例提供者 飯南多気福祉事務所二課長 福森 瑞子 助言者 こころの健康センター所長 原田 雅典

(ウ) 児童(青年)精神保健研修会

第一回

児童、思春期の社会不適應の一つ、不登校に焦点をあて今後の方向性を探ると共に、児童(青年)精神保健のあり方を考える。

日 程	内 容
平成元年7月14日(金) 13:00~15:30	講演 「登校拒否への対策」 講師 小児心療センターあすなる学園長 稲垣 卓

第二回

物的には豊かになったといわれる反面、心の豊かさが失なわれ精神的に追いつめられた大人の余波が子ども心の育ちを諸に脅かしている。心の豊かさを育むためにそれぞれの立場でどのような努力がなされているのか。又どのような事が大切なのかを考える機会を持ち、今後の児童精神保健の推進に寄与する。

日 程	内 容
平成2年2月13日(火) 10:15~12:15	円卓会議 テーマ「こころを育む育児について」 司会者 三重県保健予防課健康対策監 佐甲 隆 助言者 小児心療センターあすなろ学園医師 西田 寿美 こころの健康センター所長 原田 雅典 発言者 母親の立場から 主婦 道家 道子 父の立場から 幼稚園教諭 田口 鉄久 母子推進員の立場から 一志町母子推進員 田中 清江 保母の立場から 鈴鹿市立牧田保育所園長 武田 潔子 保健婦の立場から 関町保健婦 杉野 純子
13:00~15:00	心理の立場から 三重県中央児童相談所判定課長 藤牧 隆子 講演 「思いやりの心を育てる」 講師 津田塾大学助教授 山岸 俊子 司会 こころの健康センター所長 原田 雅典

(エ) 酒害保健研修会

アルコール依存問題は今や世界的な社会問題となっている。アルコールが引き起こす問題は多岐にわたり、それは個人の問題であると同時に家族のそして社会の問題でもある。アルコールに起因するさまざまな問題の理解を深め、地域で支える為のネットワークづくりについて今後のあり方を考える。

日 程	内 容
平成元年9月26日(火) 9:30~12:00	講演Ⅰ 「アルコール関連問題」 「アルコール依存症診断学」 講師 県立高茶屋病院医長 大越 崇 講演Ⅱ 「アルコール依存の治療」 「ネットワークづくり」 講師 県立高茶屋病院医長 猪野 亜朗
13:00~16:00	事例検討 事例名 「アルコール依存症」 事例提供者 四日市保健所保健婦 小川 恵子 助言者 県立高茶屋病院医長 大越 崇 〃 猪野 亜朗

(オ) 地域精神保健研修会

精神保健法改正後約一年余、精神障害者が地域の中で、“共に暮す”という考え方は広まりつつある。この中においてその生活を支え得るためには今後地域でどのような精神保健活動を展開すればよいのかを関係者が共に考え、理解し、その推進に寄与する。

日 程	内 容
平成2年1月30日(火) 13:30~15:00	講演 「これからの地域精神保健活動」 講師 代々木病院精神科部長 中沢 正夫

(カ) 老人精神保健研修会

高年齢人口が飛躍的に増加する事から寝たきり、痴呆などの要介護老人の増加は避けられない事である。地域社会でこれらのケースにかゝわる関係機関の職員が老人保健に関する知識を習得し、理解し、そのあり方を共に考える。

日 程	内 容
平成2年3月7日(水) 10:00~12:00	講演Ⅰ 「老年期の精神障害」 講師 三重大学医学部精神々経科助教授 井上 桂
13:00~15:00	講演Ⅱ 「老人福祉における現状と問題点」 講師 日本女子大学講師 小笠原祐次

(キ) 精神保健相談員継続研修会

精神保健に関する理論と技術の再学習を通じて精神保健活動のレベルアップを図る。

	日 程	内 容
第 一 日	平成2年3月7日(水) 10:00~12:00	講義 「老年期の精神障害」 講師
	13:00~15:00	三重大学医学部精神々経科 井上 桂 「老人福祉における現状と問題点」 講師
	平成2年3月8日(木) 10:00~12:00	日本女子大学講師 小笠原祐次 講義 「三重県における精神保健活動のすゝめ方」 講師
	13:00~14:30	三重県保健環境部保健予防課保健指導監 倉田つや子
第 二 日	14:30~16:00	「訪問活動のすゝめ方」 講師 愛知県精神保健センター精神保健指導室長 関口 純一
		「家族会、作業所とのかゝわり」 講師 大阪府枚方保健所保健福祉推進室長 石神 文子

(ク) 社会復帰指導者研修会

在宅精神障害者に対して個別、集団活動を通じて対人関係の改善、社会的習慣の確立、就労意欲の向上を図る為、保健所では社会復帰相談指導事業を実施しているが、この事業に係わる職員の技術的向上を図るためさまざまな複雑困難な事例を対象として技術的方法、処遇、援助方法等を実習、理論研修を通じて学び、今後の精神保健業務に幅広く対応できる職員の養成を図る。

実施方法は3か月を一クール（12回）として年三回実施した。各回の受講者は下記のとおりである。

	第一回	第二回	第三回
	7月～9月	10月～12月	平成2年1月～3月
受講者名	四日市 松井康子 松阪 小林佳奈子 伊勢 西場恭子 志摩 玉木友子	鈴鹿 和田正子 久居 河村かず子 尾鷲 岩崎史 熊野 大西元子	桑名 柳本美保 津 伊藤美奈子 上野 井端由加

又、受講生に対してのプログラムは別表の通りである。

別表 社会復帰指導者研修会プログラム

内 容	開催回数	第一回	第二回	第三回
	開催月	7月～9月	10月～12月	平成2年 1月～3月
オリエンテーション		1単位	1単位	1単位
集団指導実習		11	8	9
生活技術指導実習		6	8	5
作業指導実習		4	6	3
専門講義		3	3	3
計		25	25	21

* 1単位4時間とする。

(3) 広報啓発及び調査研究

項目	内容
1. 広報啓発	（1）広報啓発の推進 （2）広報啓発の推進
2. 調査研究	（1）調査研究の推進 （2）調査研究の推進
3. その他	（1）その他 （2）その他

今年度は、県民に正しい精神保健の知識の普及を図る目的で下記の事業を行った。

ア. リーフレット

元年度より、こころの健康センターとして独立し、新しい事業への取り組みの中で各関係機関の領域、職域を拡げるとともに、各関係機関に対して、当センターの役割と利用の方法をアピールした、センターの概要を作成し配布した。

また、酒害精神保健のリーフレットを、臨床医の先生用、一般飲酒者用、若い女性用と3種類発行し、各関係機関に配布した。

表1. 元年度リーフレット発行部数

	部 数 (部)
業務案内リーフレット(豊かな人生は……………)	5 0 0 0
” (空の清さに……………)	5 0 0 0
三重県こころの健康センターごあんない (冊子)	5 0 0
臨床医の先生方へ — アルコール関連疾患をもつ患者への有効な対応法について (冊子)	1 0 0 0
お酒の好きな方へ — お酒の正しい飲み方 (冊子)	3 0 0 0
妊娠とお酒 — 若い女性へのメッセージ	1 0 0 0

イ. 「こころの健康センターだより」

今年度は3回(No. 9, No. 10, No. 11)発行し、部数も昨年度の1000部から2000部に増刷した。また配布先も、保健所・医療・福祉・教育の各機関・市町村・企業・商工会・精神保健団体・他県各精神保健主管課・各精神保健センター等、領域を拡げた。

センターだよりの内容は別表のとおりであるが、No. 9では、センターの事業概要、No. 10では、思春期、No. 11では、精神障害者の地域ケアについて、それぞれ特集をし、基本的な考え方や知識を提供し、内容の充実に向けてきた。

表2. 平成元年度 こころの健康センターだより年間発行一覧表

発行年月日	内 容	執 筆 者
No. 8 (元年6月 25日発行)	センターの独立にあたって 平成元年度教育研修計画 〃 教室連絡会議等計画 鈴鹿保健所におけるディ・ケア 精神保健担当者研修会に参加して 三家連精神保健大会開かれる センター紹介	三重県保健環境部長 石 須 哲 也 三重県こころの健康センター 〃 鈴鹿保健所・保健婦室 飯南多気福祉事務所福祉二課長 福 森 瑞 子 三重県こころの健康センター主幹 萩 下 洋 一
No. 9 (元年10月 25日発行)	登校拒否への対策 少年非行について シンナー非行問題について思う事 (一補導員からの書簡) 私の心の健康法 児童相談所からみた思春期の姿 治してやりたい 地域で痴呆性老人のディケア を実施して	三重県立小児心療センター あすなろ学園長 稲 垣 卓 津家庭裁判所主任調査官 森 照 良 白山町青少年補導センター補導員 行 岡 豊 河芸町在住主婦 荒 木 久 恵 三重県中央児童相談所判定課長 藤 牧 隆 子 白山中学校教諭 村 上 茂 代 大宮町社会福祉協議会 西 直 巳
No. 10 (平成2年 2月8日発行)	精神障害の地域サポートシステム を考える 新しい時代に新しい家族会を 家族として思うこと 地域家族会の活動について 「現在の活動と今後の活動について」 ・痴呆性老人のディケア ・私の心の健康法	東京都立中部総合精神保健センター地域保健部長 村 田 信 男 三重県精神障害者家連合会 会 長 小 川 鋭 雄 奥 川 敏 子 ・桑名家族会長 清 水 茂 ・四日市〃 村 上 金之助 ・鈴鹿〃 横 山 宮五郎 ・津家族会長 松 本 太 一 ・松阪〃 林 巧 美 ・上野〃 松 生 鷹 四 度会長役場保健婦 村 木 美奈子 津市 森 部 勝

ウ、見学者の受け入れ指導

当センターが、昭和63年10月に久居庁舎に移転し、平成元年度に1つの事業所として独立した。精神保健法に基づき、さまざまな事業を行っている。

今年度は、医療関係機関からの見学者がほとんどであったが、センター事業を理解していただくよい機会であった。

表3. 平成元年度 見学者

計159名

年月日	見学者	人数(名)
H元. 4. 18	国際交流イアッツホーラムタイ国研究生	10
H元. 6. 14 10. 2	三重大学精神神経科新入局員	17
H元. 10. 25 11. 2 11. 21	看護学生	12
H2. 3. 1 3. 5 3. 6	三重大学医学部学部2年生	107
H元. 6. 13 6. 26	その他	18

エ、講演会、講義、座談会、連絡会議等

精神保健に関する正しい知識の普及、啓発を行う目的で、各関係機関の依頼にもとづいて行った。

今年度は講演、講義等の依頼件数は33回対象者1707名となっている。内容的には、ライフサイクルにおける精神保健、職場の精神保健、精神障害者の社会復帰に関する事などで、テーマが幅広く及んでいる。

また、派遣先についても、保健所、行政機関、市町村、教育機関、家族会等、多方面である。心の健康への関心が広がりつつある現代、今後もこのようなセンターの役割が多くなることが予想される。

表4. 平成元年度 他機関からの依頼の講演会、座談会、連絡会議等

回数33回 延人員1,707人
NO. 1

月日	名 称	内 容	対 象 者	場 所	主 催	派 遣 者
5・5・16	鈴鹿市立保育園 3才児部会	講義「3才児の発達のおさえ」	鈴鹿市立保育所 3才児担当保母 30名	鈴鹿市立 神戸保育所	鈴鹿市保育 総合研究協議会	保健婦
6・7	明和町中央公民館 健康教室	講演「ストレスと心身症」	一般住民 60名	明和町 中央公民館	明和町	医師
6・30	三重県 カウセンシング研究会 総会	講演「失うことと心の健康」	教員・看護・一般 80名	サン・ワーク津	三重県 カウセンシング 研究会	医師
7・5	松敷市宇気郷地区 婦人学級	講演「ライフサイクルと心の健康」	地区住民 30名	地区公民館	宇気郷地区 公民館	医師
7・11	明和町役場	こころの健康センター事業概要と見学 講義「こころの病いについて」	町健康づくり推進員 役場職員 11名	こころの健康センター	明和町	保健婦
7・12	中堅現業職員研修会	講演「要援助者への関わり方 —うつつ的傾向を有する者—」	福祉事務所 児相職員 中堅現業員 80名	津庁舎 会議室	県社会課	医師
8・16	松阪保健所 母親教室別課	講義「マクニティープルーに ならないために」 「育てることは」	松阪保健所管内 妊婦 10名	松阪保健所	松阪保健所	保健婦 心理技術者
8・30	長寿学園	講演「老年期の心の病」	地域リーダー 26名	四日市庁舎	北勢教育事務所	医師
9・6	四日市市役所 課内研修会	講演「精神障害と社会復帰」	保護課職員 保健職員 30名	四日市市役所	四日市市役所	医師
10・12	伊勢・志摩管内 「心の健康づくり教室」	心の健康づくり相談コーナー 相談員	伊勢・志摩保健所管内 学校関係職員・市町村職 員・一般住民 120名	伊勢市保健センター	当センター 協賛 伊勢・保健所	精神科ソーシャルワ ーカー 心理技術者
10・25	鈴鹿市立保育園 3才児部会	講義「相談ケースの中から」	鈴鹿市立保育所 3才児担当保母 26名	鈴鹿市立 神戸保育所	鈴鹿市保育 総合研究協議会	保健婦

月日	名 称	内 容	対 象 者	場 所	主 催 者	主 催 者
11・14	船橋市立 算所保育所父母の会	講演「子どもの心をはぐくむ」	保育園児の父母 55名	算所保育所	算所保育所	保健婦
11・26	河芸町 働く人の講座	講演「心の健康について」	町内勤労者 20名	河芸町 中央公民館	河芸町 中央公民館	医師
11・28	健康管理講座	講演「女性のこころの健康」 —失うことと心の健康—	中勢教育事務所管内職 員(小・中学校女性教師) 100名	三重中央 農協本店	中勢教育事務所 —志支部 婦人部	医師
11・29	久居・上野ブロック管内 「こころの健康づくり」 教室」	こころの健康づくり相談コーナー 相談員	久居・上野管内市町村職 員、福祉関係者、一般住 民 90名	久居庁舎 会議室	当センター 協賛 久居保健所	医師
12・4	健康管理講座	講演「失うことと心の健康」 —女性の心の健康—	松阪教育事務所 管内女性教員 108名	松阪庁舎 大会議室	松阪教育事務所	医師
12・6	松阪保健所 母親教室	講演「子育てについて」	松阪保健所管内 乳幼児をもつ母親20名	松阪保健所	松阪保健所	保健婦
H2 1・17	橋北地区 健康を考える集い	講演「心と健康」	地域リーダー 80名	橋北地区 市民センター	四日市市	医師
1・18	勤労青少年福祉推進会議	講演「思春期の心の問題」	県内勤労青少年福祉員 企業担当員 62名	県勤労者福祉会館 研修室	商工労働部労政課 三重婦人少年室	医師
1・24	上野地域家族会	講演「思春期と分裂病」	家族会会員 20名	上野保健所	家族会	医師
2・3	姫野町婦人大会	講演「心の健康」 —女のライフサイクルと 心の健康—	姫野町婦人会 200名	姫野町 社会福祉センター	姫野町婦人大会 実行委員会	医師
2・6	安全衛生管理責任者研修会	講演「職場におけるメンタルヘルス 対策について」	津・久居ブロック 安全衛生管理責任者34名	津庁舎 会議室	県職員課	医師
2・15	安全衛生管理責任者研修会	講演「職場におけるメンタルヘルス 対策について」	尾鷲・熊野管内 安全衛生管理責任者25名	尾鷲庁舎 会議室	県職員課	保健婦

月日	名 称	内 容	対 象 者	場 所	主 催	派 遣 者
2・17	松阪地域家族会例会	講演「患者と家族の対応」	家族会会員 20名	松阪保健所	家族会	医師
2・27	三重障害者職業センター 職員研修	講義「精神障害者の職業指導について」 こころの健康づくり相談コーナー 相談員	公共職業安定所職員 三重障害者職業センター 職員 10名	三重障害者 職業センター 会議室	三重障害者 職業センター	心理技術者
3・1	北勢ブロック管内 「こころの健康づくり 教室」	こころの健康づくり相談コーナー 相談員	各企業労務・健康管理担 当事者 精神病院関係者等 120名	鈴鹿庁舎 会議室	当センター 協賛 鈴鹿保健所	心理技術者 保健婦
3・2	安濃町 中央家庭教育学級	講演「子どもの心身の発達」	安濃町 中央家庭教育学級生 35名	安濃町教育委員会 会議室	安濃町教育委員会	心理技術者
3・8	安全衛生管理責任者研修会	講演「職場におけるメンタルヘルス 対策について」	南勢・志摩管内 安全衛生管理責任者23名	伊勢庁舎 会議室	県職員課	精神科ナース カウンセラー
3・9	精神保健社会復帰事業	懇話会 「保健所のデイケアについて」 「社会復帰における家族の役割について」	伊勢保健所社会復帰事業 参加者の家族 14名	伊勢保健所	伊勢保健所	精神科ナース カウンセラー
3・13	安全衛生管理責任者研修会	講演「職場におけるメンタルヘルス対策」	松阪管内 安全衛生管理責任者18名	松阪庁舎 会議室	県職員課	医師
3・14	尾鷲・熊野管内 「こころの健康づくり 教室」	こころの健康づくり相談コーナー 相談員	地区一般住民・民生委員 保健衛生・福祉関係職員 等 50名	尾鷲庁舎 会議室	当センター 協賛 尾鷲保健所	医師 心理技術者
3・22	家庭裁判所調査官 研修会	講演「最近の地域精神保健業務と 精神障害者への援助活動」	家庭裁判所調査官(補) 17名	津家庭裁判所 中会議室	津家庭裁判所	医師
3・27	津・松阪管内 「こころの健康づくり 教室」	こころの健康づくり相談コーナー 相談員	地区一般住民 43名	津保健所	当センター 協賛 津保健所	心理技術者 保健婦

オ. こころの健康づくり教室

昭和60年6月に厚生省からだされた、心の健康づくり推進事業実施要領にもとづき昭和61年度から3年計画で行ってきた。各保健所単位で、地域の特性により、県民各層の心の健康づくりの意識を高める目的と、広く啓発普及をはかるために、こころの健康づくり教室を開催し、心の健康に関する講演や相談を実施した。

実施状況は以下のとおりである。

(ア) 北勢ブロック（鈴鹿保健所）

日 時：平成2年3月1日

場 所：三重県鈴鹿庁舎4F、大会議室

内 容：①講演「職場における心の健康」

鈴鹿厚生病院

院長 山 口 隆 久

②映画「働きざかりの精神衛生」

③こころの健康相談

桑名・四日市・鈴鹿保健所相談員、こころの健康センター相談員

参加者：120名

最近、職場における欠勤、心身症、ノイローゼといった不適応者が増えている。生きがいの場、人間形成の場など、職場の意義をみつけること、職場の中でも、趣味の仲間などインフォーマルな人間関係をもつことが、心の健康を保つために大切である。自分の健康は、自分が守るべきものであるという内容の話をされた。

(イ) 中勢ブロック（津保健所）

日 時：平成2年3月27日

場 所：三重津庁舎1F

内 容：①講演「成人期及び向老期の精神衛生」

国立療養所 榊原病院

副院長 稲 地 聖 一

②こころの健康相談

こころの健康センター相談員

参加者：43名

(ウ) 伊勢・志摩ブロック (伊勢保健所)

日 時：平成元年10月12日

場 所：伊勢市保健センター

内 容：①講演「病める少年達」

国児学園

園長 小野木 義男

②こころの健康相談

こころの健康センター相談員

参加者：120名

青少年の非行の実態とその背景について、さまざまなケースを通して、子ども達が社会体制の中で苦しんでいる。そういった子ども達の真の姿を大人側が分かることが必要であるという話をされた。

(エ) 上野・久居ブロック (久居保健所)

日 時：平成元年11月29日

場 所：三重県久居庁舎2F 会議室

内 容：①講演「豊かな老年期——あなたのセカンドライフを考える——」

山本大仲病院

医師 仲 林 正 人

②こころの健康相談

こころの健康センター相談員

参加者：90名

今まで老人の方とのかかわりをもたれた経験から、それぞれの老年期の生き方についての事例をあげられた。

その中で、人への感謝、豊かな会話の相手を見つける。出会うの人を大切にする

等、自分としてどう生きるかを考えている。前向きな姿勢で望むことが、豊かな老年期をすごすために大切であるという話をされた。

(オ) 紀州ブロック (尾鷲保健所)

日 時：平成2年3月14日

場 所：三重県尾鷲庁舎

内 容：①講演「ライフサイクルからみた精神保健」

三重県立高茶屋病院

副院長 半 野 直

②こころの健康相談

こころの健康センター相談員

参加者：50名

「心の健康とは」の定義から、ライフサイクルにおける各期（胎生期・乳幼児期・学童期・思春期・成人期・向老期・老年期）の心理特性とその問題点について、分かりやすく話された。

調査研究

精神保健センターは、地域精神保健活動を推進するために、

ア. 必要な精神保健上の問題を調査研究すること。

イ. 精神保健に関する統計や資料を収集整備すること、とその運営要領に定められている。

イに関しては、設立当初より精神保健関係の各種出版物、パンフレット、新聞記事のスクラップ等出来る限りの収集整理を心掛け、関係各位からの問い合わせや貸出しにも応じられるような体制を整えつゝある。

アに関しては、三重県の地域精神保健上の諸問題を抽出し、調査研究する必要性を大いに感じながら、センターの独立整備や、業務整備に追われて、三重県独自の研究に取り組みずに現在に到っている。一応の体制が整った今後は、三重県の地域精神保健の動向をある程度概観できる位置を生かした、実地的な調査研究を積み上げてゆく必要があると考えられる。

このようなことから、平成元年度は、全国センター長会による「心の健康づくり」

生活の在り方に関する研究」——心の「病い」に関する電話相談の調査及び心の「病い」の事例研究——への参加協力が主たる研究となった。その詳細については、センター長会会報第30号に報告されている。

(4) 協力組織の育成

ア. 関係団体への協力援助

イ. ボランティア教室

ウ. 家族教室

エ. 心の健康づくり推進連絡会議

センターでは地域精神保健活動の基盤となる支持組織を育成指導すると共に、地域住民の協力や参加を促進し各種社会資源の円滑な活用を図るため以下の事業を実施した。

ア 関係団体への協力援助

(ア) 三重県精神障害者家族連合会（三家連）

昭和45年に結成以来活動を続けてきたが、公的組織として活動してゆくため昭和61年より法人化をめざし県下全域に家族会を結成することに重点を置き、昭和62年度には2ヶ所、平成2年度に1ヶ所（準備中）の家族会を充足させその準備をすすめている。当センターが三重県久居庁舎に移転したのを契機に事務局の移転がすすめられ、平成元年12月に当センター内に設置された。三家連はセンターに対して活動の方向性、教育研修等についての協力援助を求めてきており、今後センターと三家連との関係、保健所を中心とした各地域家族会への協力、援助等についてもそのあり方について検討してゆきたい。

平成元年度に実施した指導援助は下記のとおりである。

平成元年度三重県精神障害者家族連合会協力援助実施状況

年 月 日	内 容	派 遣 者
平成元年 6月11日	第18回三家連精神保健大会	原 田 所 長 萩 下 主 幹 河 合 主 査
6月24日	理事会 ○全国理事会報告 ○事務局の移転問題について ○その他	萩 下 主 幹
8月9日	事務局の移転について	萩 下 主 幹
9月16日	事務局移転について	原 田 所 長 萩 下 主 幹
9月20日	事務局の移転について	原 田 所 長 萩 下 主 幹
9月21日	事務局の移転について	萩 下 主 幹
10月21日	事務局の移転問題について	原 田 所 長

年 月 日	内 容	派 遣 者
		萩 下 主 幹 青 島 主 幹
12月16日	理事会 ○三家連カンパについて ○平成2年度三家連大会について ○その他	萩 下 主 幹

(イ) 精神障害者家族会

三重県では昭和42年5月に高茶屋病院に病院家族会が結成されて以来地域でも徐々にその結成が進み、平成2年6月現在、病院家族会2ヶ所、保健所を単位とした地域家族会が7ヶ所（内1ヶ所は準備中）となった。結成以来約20年余を経過した今、会員の高齢化が目立ちその活動にも影響を及ぼしている。又、4ヶ所の保健所に於ては地域家族会が未組織となっている。この事は会員の高齢化と並んで今後の家族会を援助してゆく上での大きな課題となっている。

平成元年度センターの各家族会に対する指導援助は下記のとおりである。

平成元年度精神障害者家族会協力援助実施状況

年 月 日	家 族 会 名	内 容	派 遣 者
平成元年			
4月9日	いすず会（高茶屋病院）	総 会	原田所長
4月18日	ときの会（津）	作業所見学（久居病院内）	萩下主幹
7月16日	わかばの会（四日市）	総 会	原田所長
9月2日	まつの会（松阪）	総 会	原田所長
9月22日	ときの会（津）	定 例 会	萩下主幹 久保主査
11月24日	ときの会（津）	定 例 会	青島主幹
平成2年			
1月24日	ひまわり会（上野）	講演「思春期と分裂病」	原田所長
2月17日	まつの会（松阪）	講演「患者と家族の対応」	原田所長

(ウ) アルコール関連組織（断酒会等）

三重断酒新生会は昭和47年に結成されアルコール依存症者の自助組織として活動している。県内も6ブロック、13支部で例会が開催され県内全域で地域に根ざした活動が行われている。

当センターでは関係諸機関に対して「アルコール依存」を正しく理解し、適切な対応ができるよう資質向上を目的とした教育研修も実施している。「アルコール依存」に関するパンフレット等も発行し、その普及啓発も行っている。

又、「アルコール問題防止のためのネットワーク作り」についても来年度に機能すべく関係機関との連携のもとに準備会を発足させ準備を進めている。

当センターの関与は以下のとおりである。

平成元年度アルコール関連組織協力援助実施状況

年 月 日	内 容	派遣者
平成元年		
7月2日	三重県断酒新生会中勢支部結成12周年記念大会	原田所長
10月15日	三重断酒新生会体育祭	萩下主幹
11月18日	アルコール問題防止のためのネットワーク作り準備会	原田所長
平成2年		
1月21日	三重断酒新生会結成18周年記念大会	原田所長

※酒害に関する教育研修（再掲）

年 月 日	内 容
平成元年	1. 教育研修事業
9月26日	講演Ⅰ, 「アルコール関連問題」 「アルコール依存診断学」 三重県立高茶屋病院院長 大越 崇
	講演Ⅱ, 「アルコール依存の治療」 「ネットワーク作り」

年 月 日	内 容
	三重県立高茶屋病院院長 猪野 重朗 事例検討会 事例名「アルコール依存症」 事例提供者 四日市保健所保健婦 小川 恵子 助言者 県立高茶屋病院院長 大越 崇 “ 猪野 重朗
平成2年 1月9日	II. ボランティア教室 講義 「アルコール依存症について」 三重県立高茶屋院長 大越 崇

※ 酒害に関する広報啓発

パンフレット発行

- お酒の正しい飲み方
- 妊娠とお酒
- 臨床医の先生方へ

—アルコール関連疾患を持つ患者への有効な対応法について—

(エ) その他作業所等

精神障害者が地域で生活してゆくためには彼等を支える社会資源が必要でありその中の1つに作業所がある。三重県では昭和59年4月に三家連会員の力の結集による県下で最初の作業所“わかば共同作業所”が会員の自宅開放という形で四日市市内に誕生した。昭和62年には厚生省の、昭和63年には四日市市の補助を受け障害者の社会復帰へのステップ台として機能してきた。そのような中から昭和63年には障害者が気軽に集まって想いを話し合えるサロンのような場所、「スマイルハウス」が誕生した。これらの刺激を受けて他の地域家族会でも作業所作りの準備が始まっている。

当センターでもこれらの施設と密なる連携のもとに障害者の社会復帰に努力したいと考えている。

平成元年度協力組織の育成実施実績

名 称	実 施 回 数	延 人 員
精神障害者家族会	16回	441人
断 酒 会	4回	450人
そ の 他	21回	483人
計	41回	1374人

教室、連絡会議

教室、会議名	目 的	対 象 者	実施回数	延参加人数
家族教室	家族自身が心を病む人の良き理解者、看護者になるために学習し、又、家族同志の交流を深める。	心に障害を持つ人の家族	9回	193人
ボランティア教室	講義、実習、見学等によって精神障害者や、各種社会復帰活動に対する理解を深めることにより、民間の人的資源としての養成を計る。	精神保健及びボランティア活動に関心のある方 一般公募	8回	240人
こころの健康づくり推進連絡会議	精神保健活動の推進を図るため、各関係機関が情報交換事例検討会、講義等を通じてその機能を明確にする。	病院、福祉、市町村、保健所の関係者	3回	63人

イ、ボランティア教室

精神障害者が地域で生活するためには種々の社会資源が必要であるし、なによりも地域の人達の理解が必要である。

ボランティア教室は、

- ① 精神障害者への理解を深める。
- ② 人的資源の育成。

を主目的として開催した。対象は一般住民とし、FM三重、近辺の市町村広報にて啓発したところ希望者が多く30名の定数に対して45名の応募があった。応募者はボランティア活動に関する関心も強く又精神障害についての理解を深めたいとの思いを持つ人がほとんどであった。31名の方が終了されたが今の所具体的な援助をいただく機会を持ってはいない。が、当センターで実施する教育研修等には熱心に参加され一層の理解に努められている。今後はボランティアバンク（仮称）として地域でお手伝いしていただく機会を計画してゆきたいと考えている。

実施状況は以下のとおりであり又、受講者の状況は表1～8のとおりである。

平成元年度 精神保健ボランティア教室 プログラム

回数	月 日	13:30	14:30	15:30
1回	10月3日 (火)	*開講式 *『ボランティア活動について』 松阪市社会福祉会館長 山岡 隆	*『精神保健法のあらまし』 こころの健康センター所長 原田雅典	
2回	10月17日 (火)	*『ライフサイクルと心の病い』	こころの健康センター主査 久保早百合	
3回	11月7日 (火)	*『精神分裂病の理解』	こころの健康センター所長 原田 雅典	
4回	11月21日 (火)	*『地域における精神保健活動について』	こころの健康センター主幹 青島 昭子	
5回	12月5日 (火)	*『痴呆老人への援助とかかわり』	度会町棚橋社会福祉協議会 活動専門員山下 隆二	
6回	12月25日 (火)	*『合同懇親会』	(社会復帰指導者研修会、家族教室、ボランティア教室参加者)	
7回	1月9日 (火)	*『アルコール依存症について』	県立高茶屋病院院長 大越 崇	
8回	1月23日 (火)	*『反省会』 *終了式		

精神保健ボランティア教室実施要領

(ア) 目 的

精神障害者の治療や、社会復帰に対する考えは、従来の入院治療中心から、地域精神医療へと次第に視点を移してきている。

このような状況のもとでは、社会資源を如何に有効に活用するかということも、社会復帰を促進していくうえで重要な要素となる。特に人的資源について考えるなら、従来は医師、看護婦、ソーシャルワーカー、保健婦などの専門的な人々によって支えられてきた。

しかし、共同作業所や回復者クラブ、共同住居など、地域に根ざした生活の場が志向されている現在の状況のもとでは、専門家集団による力だけでは、その目的を達しえない。むしろより広く、人的資源を求めていくことで、これを支え、押しすすめていくことができるものと期待されている。

そこで、このような人材を精神保健ボランティアとして育成していくことが必要と思われるので、その育成を目的として、ボランティア教室を開催するものとする。

(イ) 主 催

三重県こころの健康センター

(ウ) 日 時

平成元年10月3日～平成2年1月23日まで隔週火曜日13:30～15:30

(エ) 会 場

三重県こころの健康センター

(オ) 対 象

一般住民、民生委員、人権擁護委員、婦人会、その他地域作業所等で協力していただける方で、精神保健及びボランティア活動に関心があり、受講後ボランティアとして活動する意志のある方。定員 20人

(カ) 内 容

1) 別紙1のとおり

(キ) 費 用

受講料は無料とする

(ク) 募集方法

別紙1の募集文を利用して公募する

(ケ) 申込方法及び期日

別紙1の募集文に添付されている申込み用紙により申込み。

締切9月9日(土)ただし定員に達し次第締め切るものとする。

表1. 受講者年代別、経験別、職業別状況

年代	区分 人数 (%)	ボランティア経験			有 職 者							専 業 主 婦	不 明
		有	無	不明	寮 母	看 護 婦	団 体 職 員	結 婚 相 談 員	自 営	住 職	ア ル バ イ ト		
20	1 (3.2)	1			1								
30	7 (22.6)		6	1		1	2		1			2	1
40	9 (29.0)	5	3	1				1			1	6	1
50	6 (25.8)	1	3	2		1						3	2
60	8 (25.8)	4	3	1					1	1		4	2
計	31	11	15	5	1	2	2	1	2	1	1	15	6
	%	35.5	48.4	16.1									

表2. 受講者地域別(保健所管内)

地 域	津	久 居	松 阪	伊 勢	上 野	計
参加者数	11	9	9	1	1	31
%	35.6	29.0	29.0	3.2	3.2	100

表3. 受講者の趣味、特技など（複数回答）

種 別	人 数	種 別	人 数	種 別	人 数
茶 道、華 道	3	大 正 琴	1	新 聞 発 行	1
書道、ペン習字	4	音 楽 鑑 賞	4	ワ ー プ ロ	1
和 洋 裁	4	切 手 収 集	1	イ ン テ リ ア 関 係	1
手芸、刺繍、編物	7	珠 算	1	16ミリ撮影	1
現 代 作 法	1	料 理	2	ド ラ イ ブ	1
着 物 着 つ け	1	読 書	6	ハ イ キ ン グ	1
俳 句、俳 画	3	園 芸	3	ス ポ ー ツ (水泳、テニス、 スキー、卓球)	5
剣 舞	1	旅 行	1		

受講者のボランティア教室に対する意見、感想をまとめてみると

日程に関しては、つぎのような意見があり

- 1日の講義時間の延長
- 受講回数増加

内容に関しては

- 各論についてもっと深く知りたい
- 体験学習の増加
- 受講生のフリートーキングの時間設定などがあげられる。

又、別の角度から

- 自分自身の生活の仕方を見直す良い機会となった。

表4. ボランティア教室開催の情報入手場所

項 目	%
市 政 だ よ り	42.1
婦 人 会	
町 村 役 場	5.3
保健所、福祉事務所	
社会福祉協議会	5.3
F M 三 重	
こころの健康センター	
友 人 、 知 人	31.5
そ の 他	15.8

表5. 受講の動機（複数回答）

動 機	%
ボランティア活動を行いたい	36.8
精神保健知識の習得	84.2
老人への関心	26.3
精神障害者への関心	52.6
そ の 他	15.8

表6. 受講者の変化

項 目	区 分		
	% かなり変化した	% 少し変化した	% 変化なかった
精神障害者に対して	15.8	68.4	5.3
精神障害をもつ老人に対して	15.8	52.6	5.3
精神病院に対して		57.9	21.1
精神保健全般に対して	15.8	68.4	10.5

※ 無回答があるため 100%にならない。

などがあり、今後センターにて開催される催し物には是非参加したい。次回開催時にも再度受講したい等が多かった。又、ほとんどの人が機会があれば力を貸せるよう努力したいとの事であった。唯一の障害者とふれ合う体験学習、合同懇親会－クリスマス会－（ボランティア教室及び家族教室受講者、社会復帰指導者研修会受講者及び会員による）では、即席とは思えない出し物でそのパワーを見た想いがした。

表7. 希望する、施設見学場所（複数回答）

施設名	割合	%
精神病院		21.1
アルコール病棟		15.8
思春期病棟		42.1
老人施設		52.6
デイケア		36.8
共同作業所		52.6
その他		5.3

表8. ボランティア活動可能日数

可能日数	割合	%
月・1～2回		36.8
週・1回		26.3
週・2回		10.5
どのような時間でも努力する		5.3
その他		5.3

※ 無回答有の為 100%にならない

センターではボランティア教室開催は今年度が初年度であり他府県の開催状況等を参考としながらも手探りの状態での開催であったが第一期生の貴重な意見を基にして米年度は更に充実させ実施の予定である。

7. 家族教室

地域で暮らす精神障害者の再発再入院を防止するための三要素として、適正医療、デイケアや作業所等、支えのネットワーク、そして家族のあり方があげられている。家族は、身内に障害者を抱えながら、地域の中で、偏見に苦しみ、また障害者本人へのよいかかわり方を学ぶ機会もなく、社会で孤立している事が多い。身体疾患と異なり、目に見えない部分の多い精神疾患への知識のなさや、対応の困難さの中でからまわりし、悪循環を繰り返すことも少なくない。

また、近年、増加が著しいといわれる神経症、うつ病、心身症といった適応障害を持つ人の家族も、不登校や摂食障害、出社拒否といった形で表われるため、とまどい、不安や焦りの中で深刻な悩みを持ちながら暮らしている。

昭和63年度、センターに寄せられた精神保健相談件数1211件中、277件（23%）が、家族からの相談によるもので、家族自身の知識の向上や対応の変化により、かなり改善

が期待できる内容のものが多かった。

これらのことから、平成元年度より、こころの病を持つ人の家族を対象として、家族教室を開催した。

(ア) 家族教室の概要

a. 目的

心を病む人を持つ家族に対して、指導、教育、相談及び家族同志の交流を図り、障害者本人を支えるための知識、理解を深める。

b. 対象

心を病む人を持つ家族

c. スタッフ

こころの健康センター職員（精神科医、精神科ソーシャルワーカー、臨床心理士、保健婦）外部講師

d. 開催日

平成元年7月～平成2年3月

毎月第4水曜日（第4回、第6回は月曜日に実施）9回

午前10時より午後3時まで（4時間）

e. 内容

平成元年度のプログラムを表Iに示す。午前、午後と終日の実施のため、講義、グループカウンセリング、レクリエーション、懇談会を同種のもので重ならないよう組み合わせ、受講者が疲れないよう配慮した。プレ面接、個別面接はスタッフ全員が分担し、受講者全員に実施した。講義では、心の病について医学的、心理的、社会的な側面からの理解を深めた。グループカウンセリング、懇談会では、お互いの体験の交流や具体的な助言を得ながら、日常生活への洞察を促した。また、簡単な手遊びから、ゲーム、音楽に合わせての競技をレクリエーションとしてとり入れ、日頃遊びの少ない家族の心身面でのリラクゼーションを図った。デイケア参加メンバーとの合同ハイキングやボランティア教室受講生を含んだ合同クリスマス会は、家族が地域に対して肯定的な期待や関心を向けられるよう出席者同志の相互の交流を援助した。

表1. 平成元年度家族教室プログラム

	内 容	
	午前(10:00~12:00)	午後(1:00~3:00)
7月26日(水)	開講式・所長挨拶・自己紹介	センター見学・プレ面接・室内レク
8月23日(水)	講義「やさしい精神医学Ⅰ」 こころ健康センター-所長 精神科医 原田雅典	プレ面接・室内レク・懇談会
9月27日(水)	講義「家族のための心理学」 こころ健康センター-臨床心理士 久保早百合	グループカウンセリング 高茶屋病院-臨床心理士 杉野健二
10月23日(日)	デイケア、家族教室合同ハイキング(四季の里)	
11月22日(水)	パネルディスカッション 「地域で障害者を支えるには」 高茶屋病院-精神科ソーシャルワーカー 山崎晴彦 津保健所-保健婦 田中郁子	個別面接・クリスマス会準備
12月25日(月)	デイケア、ボランティア教室、家族教室合同クリスマス会	
1月24日(水)	講義「社会復帰における家族の役割」 こころ健康センター-精神科ソーシャルワーカー 森下洋一	個別面接・懇談会・リラックス体操
2月28日(水)	講義「やさしい精神医学Ⅱ」 こころ健康センター-所長 精神科医 原田雅典	個別面接・懇談会
3月28日(水)	講義「再発防止について」 こころ健康センター-精神科医 小川理恵子	懇談会・閉講式

f. 結 果

当初10名程度の参加者を予想して計画をたてたが、市の広報紙やラジオの放送等で公募したところ、予想を上まわる希望者が集まり、21名に枠を広げて開始した。

初回の試みとして、病名や状態の軽重にとらわれず、広く心の病を持つ人の家族として参加者を募ったが、精神病が大半を占め、不登校を主訴とするものが2名含まれた。

申込み締切日を設定し、受講者には決定通知を送付した。ところが、開催日初日にとび入りで受講を希望する家族が何組か来所し、次回の面接を予約して帰っていただ

くというハブニングもあった。

受講者数は、延156名で1回平均17.3名の参加であった。受講者の内訳は表2のとおりである。母親が76%と大半を占めた。

表2. 受講者内訳

	母	父	義姉	計
出席者数	16	3	2	21
割合(%)	76.2	14.3	9.5	100.0

保健所管内別にみると(表3)鈴鹿管内が8名(38%)と一番多く、参加の動機は家族会からの紹介によるものがほとんどであった。

表3. 保健所管内別受講者数

保健所管内	数	割合(%)
桑名	1	4.8
四日市	2	9.5
鈴鹿	8	38.0
久居	2	9.5
松阪	3	14.3
上野	1	4.8
伊勢	2	9.5
志摩	1	4.8
県外	1	4.8
計	21	100.0

センター周辺の市町村からの参加が比較的少なく、(津, 0, 久居, 2)通所に片道1時間以上かかる地域(桑名、四日市、鈴鹿、上野、伊勢、志摩、県外)からの参加が16名76%と多かった。

教室終了時、簡単なアンケートを実施した。

(表4)

受講後、次の点について変化しましたかという問いに対して

- ① 「精神障害の知識」はかなり変化したと答えた人が76.9%あり。
- ② 「本人への対応」については、53.8%、約半分の人がかかなり変化したと答えている。
- ③ 「自分自身の気持ちのもち方」については、84.6%がかかなり変化したと答えており、受講後の懇談会でも、「教室に出席して気持が楽になった」「親自身救われた」と感想を述べる人が多くみられた。

表4. 閉講時 アンケート

受講後、次の点について変化しましたか

(%)

	かなり変化した	少し変化した	変化しなかった	未 記 入
①精神障害の知識	10 (76.9)	2 (15.4)	0 (0)	1 (7.7)
②本人への対応	7 (53.8)	6 (46.2)	0 (0)	0 (0)
③自分自身の気持ちのもち方	11 (84.6)	2 (15.4)	0 (0)	0 (0)

まとめ

教室開催は、センター事業としては、初回のため、プログラムの作成、応募方法、運営等、細部で予想外の事も多々あったが、教室全体の雰囲気は、第1回目より熱心で、受講生間の交流も早くからでき、和やかであった。終日のプログラムであったので、昼休みを利用して情報交換する場面が多くみられ、休憩時間がグループワークに変わることもしばしばあった。講義終了後のフリータイムが緊張がほぐれ特に盛んで、緩急をとりまぜたプログラム編成は、今後の教室にもとり入れていく必要があると考える。

リラクゼーションを目的とした軽いゲームや体操を個別面接の待ち時間等に実施したが“遊び”の少ない家族にとっては新鮮な体験だったようで、好評であった。教室運営上、有効だと考える。

受講生は長い経過を持つ障害者を抱えた人や、発病してまだ間のない人の家族、等々、背景は様々であったため、講義やプログラム内容の個々の不一致な点については面接でカバーした。そのため、運営上の不満や混乱はなかったが、次回からはグループの属性を、

ある程度一致させた方が実施が容易であると考える。

1ヶ月1回の開講日を楽しみに仕事をやりくりしたり、日程を調整してくる家族も多く、「ここへ来るとホッとします」「うれしいです」という声が毎回きかれ、地域における家族の不安と孤立した様子が伺えた。

閉講が近づくと、「この縁を大切にしたい」とグループ継続の要望が出たため、参加者名簿を作成し、配布した。今後のセンターでの研修や行事への参加を含め、自主グループとしての成長を支援していく予定である。

経過の長い精神障害を持つ人の家族でも、病気や社会制度等全般にわたり、断片的な知識しかない人が多く、早期における系統だった家族教育と、家族自身を支える場の確保を、家族会への支援と並行した形で推進していく必要がある。

エ. こころの健康づくり推進連絡会議

当センターでは、平成元年度より保健所、福祉事務所、病院の実務者及びセンターの職員をもって、「こころの健康づくり推進連絡会議」（精神障害部会）を発足させ、年間3回開催し、精神保健業務の現状及び課題について検討するとともに、関係機関の連携を密にするため連絡会議をもった。

こころの健康づくり推進連絡会議実施要領

(ア) 目的

近年の社会生活環境の複雑化に伴いストレスが増大し、ノイローゼ、うつ病等精神疾患が増加していることにかんがみ、これら精神疾患に関する現在の問題を明確にし今後の展望を考慮するとともに、精神保健に関する知識の普及等を行うことにより、精神的健康の保持増進を図る。

(イ) 実施団体 … こころの健康センター

(ウ) 精神障害部会の設置

上記の目的のために連絡会議に精神障害部会を設置し、精神保健業務の現状及び課題について検討するとともに、各関係機関相互の理解を深めその役割を明確にし、更に連携を密にすることにより精神保健活動の推進を図るため、次の事項を協議する。

(エ) 協議事項

- * 関係機関の情報交換
- * ケース検討会
- * 関係機関等の協力体制の整備・調整に関する事。
- * その他、地域の実情に応じた精神保健活動の推進に必要な事項に関する事。

(オ) 構成メンバー

保健所（津、久居）

福祉事務所（中勢、津市、久居市）

病院（関連病院）の関係職員

平成元年度 こころの健康づくり推進連絡会議実施状況

開催日	議 題	出席者	
第 一 回	平成元年 10月4日	1.精神保健業務を推進するために 各機関の連携について —現状と問題点— 1)各機関の状況について報告	久居病院2名(医1、ケースワーカー1) 国立療養所榊原病院3名 (医師2、心理1) 県立高茶屋病院2名(医師1 ケースワーカー1)
	・総括 地域での精神保健活動を進めるうえで、各機関の連携の必要性が強調された。各機関が自分達の領域の中でどこまで援助すればよいのか、或いは、どの時点で連携を必要とするのか、公的な場で検討されないままにきた分野でもあった。 今後、事例を通して、お互にどう連携し合うか検討していく必要を感じた。	津市社会福祉事務所 2名 久居市社会福祉事務所 2名 中勢福祉事務所 2名 津保健所 2名 久居保健所 2名 こころの健康センター 3名 計 20名	
第 二 回	平成元年 12月6日	1.精神保健業務を推進するために 各機関の連携をめぐって 1)事例検討会 —生活保護ケースをめぐって— 事例報告者 中勢福祉事務所 主事 平野 昌 助言者 松阪厚生病院 ケースワーカー 郡 恵子	久居病院2名(医1、ケースワーカー1) 国立療養所榊原病院2名 (医師1、心理1) 三重大学附属病院2名 (医師1、研修医1) 県立高茶屋病院2名(医師1 ケースワーカー1)
	・総括 ケースは直接かかわっている各機関の担当者の参加によって、現実に即した事例検討会をもつことが出来た。情報交換、意見交換等によって、連携の必要性が語られ、他の関係機関に対しても、良い刺激になった。	津市社会福祉事務所 2名 久居市社会福祉事務所 1名 中勢福祉事務所 2名 津保健所 3名 久居保健所 4名 こころの健康センター 3名 計 23名	

開催日	議題	出席者
平成2年 2月22日	1.精神保健業務を進進するために 各機関の連携をめぐって —今後の展望— 1)各関係機関よりの報告	久居病院2名(医1、ケース-カ-1) 国立療養所榊原病院2名 (医師1、心理1) 県立高茶屋病院3名(医師1、ケ- ス-カ-1、福祉系大学実習生1)
	・総括 生活保護適用外のケースの処遇をめぐって、各機関が どこまで、その責任を持つかで、意見交換がなされた。 行政的には保健所が対応することになるが、各機関で十 分に検討しないまま保健所に押しつけてしまうケースも ある。 今後、こうした問題を解消していくには、地域の中で 連絡相談体制のシステム化を検討していく必要があるよ うに思う。	津市社会福祉事務所 2名 久居市社会福祉事務所 1名 中勢福祉事務所 2名 津保健所 1名 久居保健所 3名 こころの健康センター 3名 計 19名

○ 終わりに

昭和62年、精神保健法の改正以降、精神保健活動への社会的要請が一層増大し、地域の関係機関の連携を確立する必要が高まりつつあり、このような背景の中で、関係機関との連携を図るため連絡会議をもった。

今年度は、3回の連絡会議をもつことが出来、多くの参加を得て行うことが出来た。連絡会議のメンバーは、津市、久居市管内の病院の医師、ケースワーカー、心理、福祉事務所ケースワーカー、保健所精神保健担当者、保健婦をもって構成し、各関係機関から2～3名の参加が得られた。

連絡会議の主旨は、精神保健業務の現状及び課題について検討するとともに、関係機関の協力と援助を図ることが目的で、連絡会議は、日常業務を通じ相互に問題提起し、話し合いを重ねた。しかし、連携することで効果的な援助が期待できても、各機関がお互いにかかわっていないことが多いこともわかった。

今後、行政的には別として、関係者の所属する機関で精神障害者の流れがどうなっているのか、どこで他の機関と、どうつながればよいのか、今後の検討課題として取り上げ、関係機関相互の連携を発展させていくよう努力したい。

(5) 精神保健相談

精神保健相談とは、個人や家庭、職場、学校などで生じた精神的苦痛や悩みを、専門的知識と経験をもとに、相談員が相手と対話を通じて理解し、適切な対応を助言することです。相談員は、相手の話を傾聴し、その感情や考えを尊重しながら、必要な情報を提供し、自己解決の力を引き出す役割を担います。

相談の対象となる問題は、うつ病、不安障害、アルコール依存症、認知症、自殺リスク、家族関係の不和、職場でのストレス、子どもの発達障害など多岐にわたります。相談は、匿名性や機密性を確保し、安心して受けられる環境を整えることが重要です。

相談内容	対応方針
うつ病、不安障害	専門機関への紹介、薬物療法、認知行動療法
アルコール依存症	断酒会への参加、認知行動療法、薬物療法
認知症	認知症ケアセンターへの紹介、介護サービス
自殺リスク	24時間対応の自殺対策センターへの連絡、緊急入院
家族関係の不和	家族関係改善プログラム、家族療法
職場でのストレス	職場環境改善の助言、ストレスマネジメント研修
子どもの発達障害	発達障害者支援センターへの紹介、療育プログラム

精神保健相談は、地域社会のメンタルヘルスケアを支える重要な役割を果たしています。相談員は、継続的な研修やスーパービジョンを受け、最新の知識とスキルを習得し、質の高い相談サービスを提供する必要があります。

また、相談員自身も精神的な負担を抱える可能性があります。定期的な自己ケアやサポートを受けることが、持続可能な相談活動のために不可欠です。

相談事業の内容は、「こころのテレフォン相談」（電話相談）「こころの健康相談」（来所相談）である。

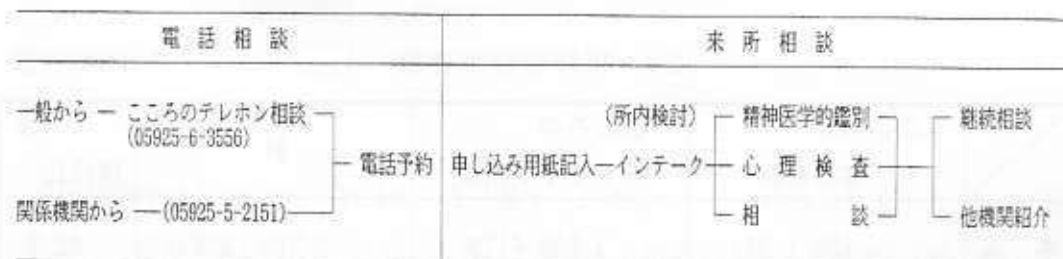
「こころのテレフォン相談」は、毎週月～金曜日の午前10時～午後4時まで、専用電話にて相談に応じており、その対応は専任の嘱託相談員（看護職）2名があたっている。又、時間外相談については、留守録を利用し、必要な場合には翌日センターより連絡をとる事としている。

こころの健康相談は、特定専門相談も含め、毎週火、木曜日を原則としてきたが、相談数の急増により、他の曜日でも随時予約をとり対応した。

相談員は、昭和63年度は医師（所長）1名、ソーシャルワーカー1名、保健婦（精神保健相談員）2名の計4名であったが、平成元年度には心理技術者1名が増員となり、計5名となった。

こころの健康相談の急増と、相談員の充実に伴いすべての相談についてはインテーク後所内検討することにより、それぞれの相談内容に適した方法がとれるよう「相談の流れ」を図1のように整えた。

図1. 相談の流れ



平成元年度における相談の概要は以下のとおりである。

相談件数（表1、表2）をみると、来所相談では前年比159%、テレフォン相談では175%、相談全体でみると170%と急増している。

表1. 平成元年度相談件数

() 内の新規件数

		件 数	構成比 %
こころの健康相談		272 (109)	13.0
こころの テレフォン相談		1817 (315)	87.0
再 掲	思 春 期	424 (121)	20.3
	老 年 期	39 (19)	1.9
	酒 害	10 (7)	0.5
計		2089 (424)	100.0

表2. 昭和63年度相談件数

		件数	%
こころの健康相談		171	13.9
こころの テレフォン相談		1040	84.3
酒 害		16	1.3
計		1227	100.0

相談者別件数(表3)をみると来所相談では、直接本人からのもの120件(44.1%)家族からのもの143件(52.6%)となっており、テレフォン相談では本人からのもの1599件(88.0%)家族からのものが189件(10.4%)となっている。来所相談では、テレフォン相談に比べて家族の占める割合が多い。

表3. 相談者数別件数

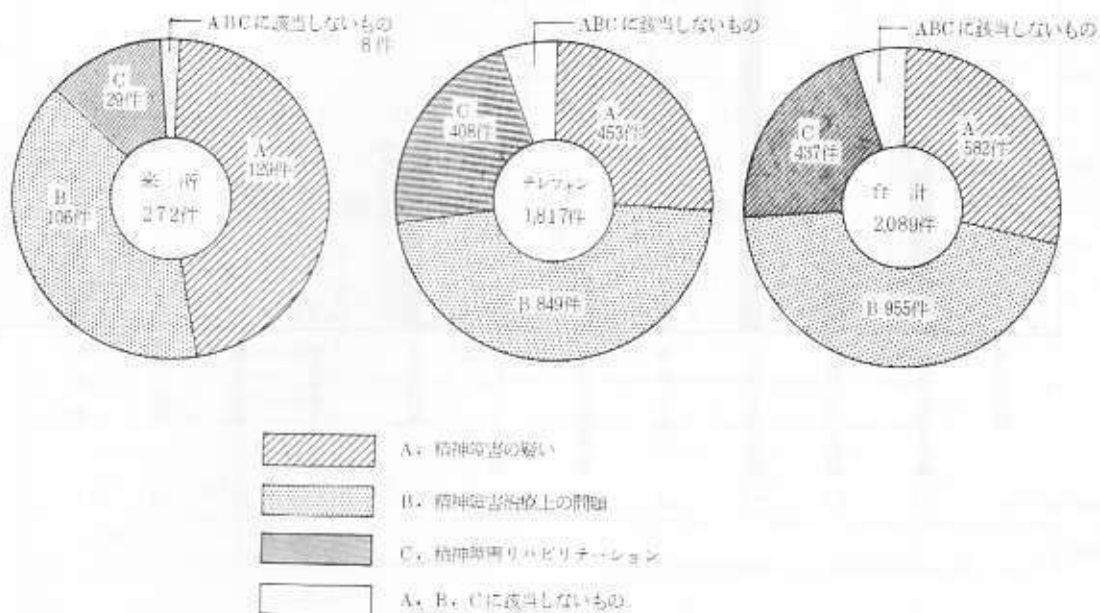
() 内は新規件数

	こころの 健康相談	こころの テレフォン相談	計	% 構成比
本 人	120 (36)	1,599 (173)	1,719 (209)	82.3
家 族	143 (68)	189 (123)	332 (191)	15.9
その他	9 (5)	29 (19)	38 (24)	1.8
計	272 (109)	1,817 (315)	2,089 (424)	100.0

相談内容は、A. 精神障害の疑い、B. 精神障害治療上の問題、C. 精神障害リハビリテーション、ABC以外のものの4つに大別した。(図2)

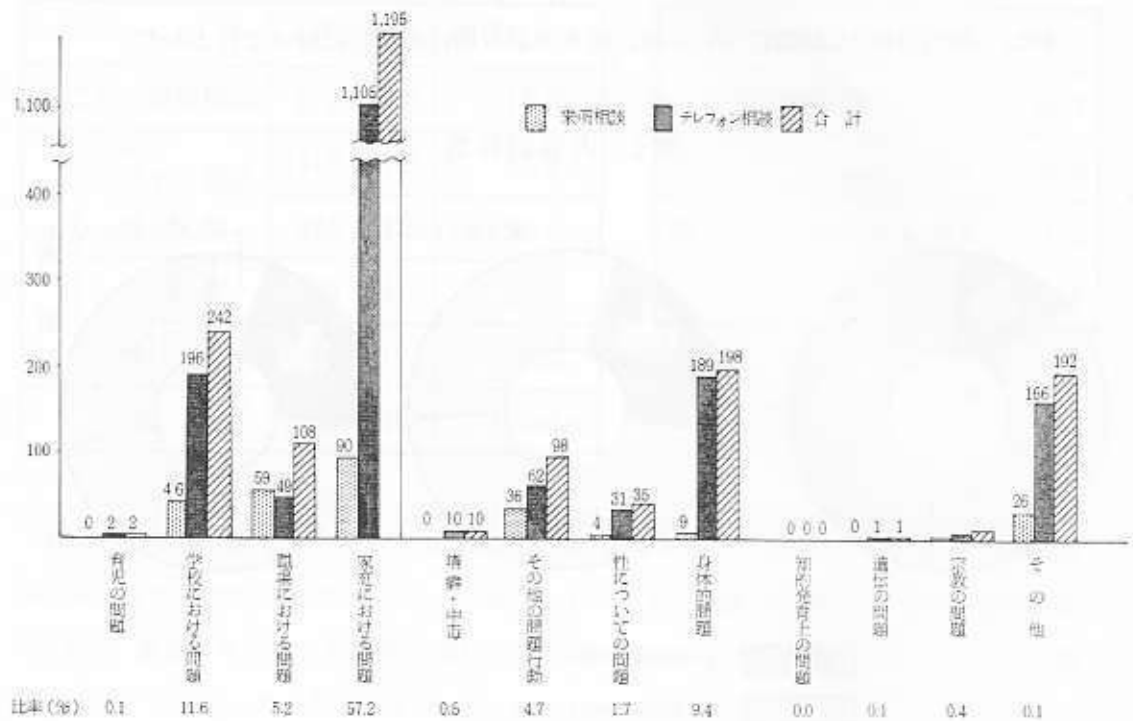
また、より具体的な問題については、図3のように12の項目に分けて計上した。

図2. 内容別件数



来所相談ではAが129件(47.4%)と一番多く、治療のルートにはまだ乗っていない継続面接の必要なケースが目立った。一方、テレフォン相談では、Bが849件(46.7%)と一番多く、日常生活の些細なつまずきで挫折しやすい不安の高い相談者が、テレフォン相談によってなんとか地域での生活を維持しているケースもかなり含まれている。

図3. 問題別件数



問題別に分類してみると、家庭における問題が1195件（57.2%）第1位で、主に家庭内葛藤を基因とする訴えが多く、家庭婦人によるものが目立った。学校における問題は、242件（11.6%）と第2位で、63年度の106件と比べると2倍以上の伸び率である。米所相談46件は、不登校を訴えるものが大半を占め、テレフォン相談の中には、いじめや学校生活への不適応を毎日のように相談してくるケースがある。

性別、年代別にみても、（図4、図5、図6）米所相談では（図4）成人男性が115件（42.3%）と一番多く、次いで思春期の女子が74件（27.2%）となっている。男女比をみると男性がやや多い傾向にある。テレフォン相談では（図5）成人女性が1247件（59.7%）と第一位で、地域で暮らす適応困難なケースからの細々とした相談が多く含まれている。

図4. 性別、年代別来所相談数

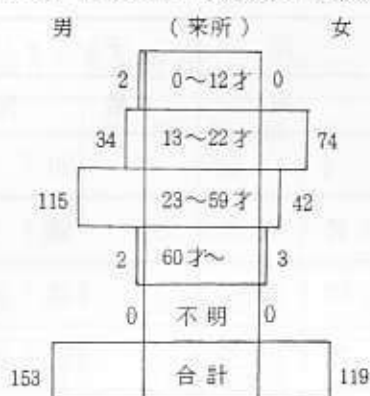


図5. 性別、年代別テレフォン相談数

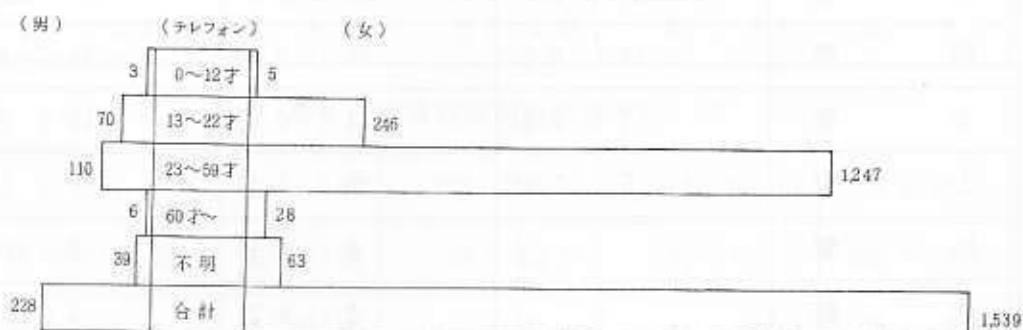
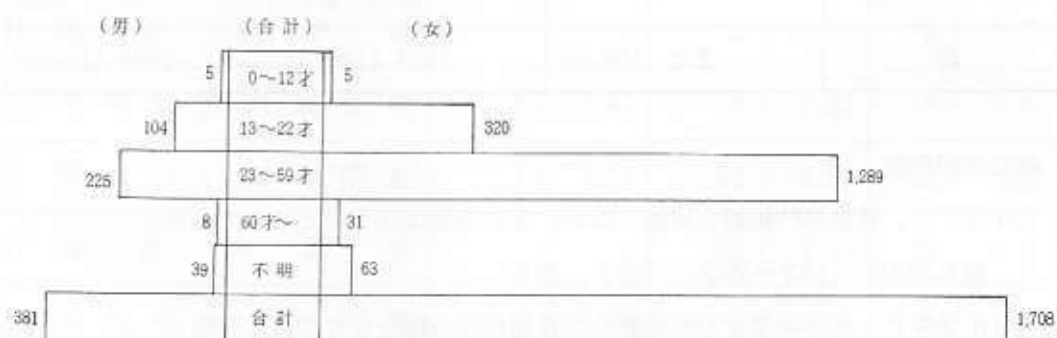


図6. 性別、年代別相談数



保健所管内別の相談者数をみると(表4)、来所相談では、津管内が72件(26.5%)と一番多く、鈴鹿、四日市、久居の順となっている。テレフォン相談では、鈴鹿管内が543件(29.9%)、次いで松阪、津と続いている。

表4. 保健所管内別相談件数 ()内は新規件数

保健所	来 所		テレフォン		合 計	
	数	%	数	%	数	%
桑 名	4	(1.5)	30	(1.7)	34	(1.6)
四 日 市	45	(16.6)	68	(3.7)	113	(5.4)
鈴 鹿	52	(19.1)	543	(29.9)	595	(28.5)
津	72	(26.5)	454	(25.0)	526	(25.2)
久 居	40	(14.7)	67	(3.7)	107	(5.1)
松 阪	27	(9.9)	459	(25.3)	486	(23.3)
伊 勢	18	(6.6)	66	(3.6)	84	(4.0)
志 摩	7	(2.6)	11	(0.6)	18	(0.9)
上 野	5	(1.8)	26	(1.4)	31	(1.5)
尾 鷲	()		2	(0.1)	2	(0.1)
熊 野	()		3	(0.2)	3	(0.1)
県 外	2	(0.7)	9	(0.5)	11	(0.5)
不 明	()		79	(4.3)	79	(3.8)
計	272	(100.0)	1817	(100.0)	2089	(100.0)

特定専門相談

元年度より、特定専門相談を実施したが、その内容は以下のとおりである。

ア. 思春期相談 (13才～22才) (表5、表6)

中学生から大学卒業までの年齢を思春期相談の枠としてとらえ実施した。

来所相談は108件あり、来所相談総件数272件の40.0%を占めている。テレフォン相談のそれは、316件17.4%で思春期の相談は、今後も増加する事が予想される。

相談内容をもてみると、精神障害の疑いのものが合計で332件 (78.3%) あり、問題別にみると、学校における問題が233件 (55.0%) と第一位で、家庭における問題

70件 (16.5%)、職場の問題30件 (7.0%) と続いている。

表5. 思春期内容別相談件数

	来 所 相 談 (%)	テレフオン相談 (%)	計 (%)
総 件 数	108 (100.0)	316 (100.0)	424 (100.0)
A 精 神 障 害 の 疑 い	83 (76.9)	249 (78.8)	332 (78.3)
B 精 神 障 害 治 療 上 の 問 題	19 (17.6)	35 (11.1)	54 (12.7)
C 精 神 障 害 リ ハ ビ リ テー シ ョ ン	1 (0.9)	2 (0.6)	3 (0.7)
A, B, C に 該 当 し な い も の	5 (4.6)	30 (9.5)	35 (8.3)

表6. 思春期問題別相談件数

総 件 数	108 (100.0)	316 (100.0)	424 (100.0)
E 学 校 に お け る 問 題	46 (42.6)	187 (59.1)	233 (55.0)
F 職 場 に お け る 問 題	19 (17.6)	11 (3.5)	30 (7.0)
G 家 庭 に お け る 問 題	26 (24.1)	46 (14.6)	72 (17.0)
H 嗜 癖 中 毒	()	2 (0.6)	2 (0.5)
I そ の 他 の 問 題 行 動	8 (7.4)	4 (1.3)	12 (2.8)
J 性 に つ い て の 問 題	3 (2.8)	19 (6.0)	22 (5.2)
K 身 体 的 問 題	()	22 (7.0)	22 (5.2)
L 知 的 発 育 上 の 問 題	5 (4.6)	()	5 (1.2)
M 遺 伝 の 問 題	()	1 (0.3)	1 (0.2)
N 宗 教 の 問 題	()	()	()
O そ の 他	1 (0.9)	24 (7.6)	25 (5.9)

イ. 老年期相談（60才以上）（表7、表8）

全相談中60才以上の相談は39件（1.9%）であった。

相談内容は、精神障害治療上の問題が18件（46.2%）精神障害の疑いのものが17件（43.6%）あった。

問題別にみると家庭における問題が19件（48.7%）その他の問題行動が8件（20.5%）と続き、この中には老人性痴呆による問題行動についての相談が含まれる。

表7. 老年期相談内容別件数

	来所相談 (%)	テレフォン相談 (%)	計 (%)
総件数	5 (100.0)	34 (100.0)	39 (100.0)
A 精神障害の疑い	2 (40.0)	15 (44.1)	17 (43.6)
B 精神障害治療上の問題	3 (60.0)	15 (44.1)	18 (46.2)
A B Cに該当しないもの		4 (11.8)	4 (10.2)

表8. 老年期相談問題別件数

	来所相談 (%)	テレフォン相談 (%)	計 (%)
総件数	5 (100.0)	34 (100.0)	39 (100.0)
G 家庭における問題	1 (20.0)	18 (53.0)	19 (48.7)
I その他の問題行動	2 (40.0)	6 (17.7)	8 (20.5)
J 性についての問題		1 (2.9)	1 (2.6)
K 身体的問題	2 (40.0)	5 (14.7)	7 (17.9)
N 宗教の問題		1 (2.9)	1 (2.6)
O その他		3 (8.8)	3 (7.7)

ウ. 酒害相談 (表9)

元年度は酒害相談の総件数は10件で来所相談はなく、全てテレフォン相談によるものであった。

アルコール専門病棟を持つ県立病院が隣接市にあることや、保健所への酒害ケースのコンサルテーションの増加等から、直接、センターへ相談が持ち込まれる事が少なくなったのではないかと考える。

相談者別にみると、家族からのものが8件と大半を占めている。

表9. 酒害相談者別件数

相談者	件数
本人	1
家族	8
その他	1
計	10

Ⅲ. 事例検討会のあり方をめぐって
— アンケート結果から —

1. はじめに

昭和61年5月、当センターが開設され、同年9月より保健所への技術指導援助事業が開始された。この事業の1つとして、保健所に於ける精神保健事例検討会への技術援助を実施した。当初は、県下11保健所を中心にセンター事業の紹介と普及を目的にセンター職員が説明に出向くという形のものであった。

それまでは、保健所に於ける事例検討会の中で、精神保健に関するものが検討されるという事はあまりなかった。昭和62年頃より本格的に実施されるようになったものの、事業の関係でセンターの指定する日程であった為、保健所事業とかみ合わない事もあってか、その回数は少なかった。

昭和63年度からは、各保健所の要望に添った企画とした為、徐々に定着し、平成元年度からは、保健所に限らず、教育、福祉等へ分野を拡げる等、質量共に増加充実してきている。

この事業を開始して5年を経た今、保健所間に、会の位置づけ、運営等、格差が表われ、又、センター事業の大幅な増大とも関係し、今までの一律の技術援助についても検討を加える必要がでてきた。

また、センターに於いても、医師、精神科ソーシャルワーカー、臨床心理士、保健婦が各々の専門性を生かした技術援助になり得ているのかという疑問も生じてきた。

このような観点から、今回県下11保健所で主に会を主宰している保健婦長を対象に、アンケートを実施し、今後の方向性を探る一助とした。

2. 事例検討会に関するおたずね 集計結果

(1) 年間の事例検討会について、あらかじめ内容についての計画はたてておられますか
表1.

	保健所数	%
a. たてている	4	36.4
b. たてていない	7	63.6

〔2〕前もってセンターへ事例をお送りいただいておりますが、所内での事例の流れはどうでしょうか

表2.

	保健所数	%
a. 担当保健婦→婦長→センター (室内のみ)	8	72.7
b. 担当保健婦→副婦長→婦長→所長 (予防課職員、所長等の決裁があるところ)	3	27.3

〔3〕事例検討会の進行係はありますか

表3.

	保健所数	%	どなたがされますか
a. ある	10	90.9	当番保健婦 8、精神担当保健婦 1、予防課 1
b. ない	1	9.1	

〔4〕事例はどのように選ばれますか

表4.

	保健所数	%
a. 現在問題があり困っているケースを提出する	10	90.9
b. 問題や病気の種類を考えて提出する	1	9.1

〔5〕貴保健所の事例検討会の問題点についてお書き下さい

表5.

複数回答10件

事例検討会の問題点 (件数)		件数
a. ケース記録	<ul style="list-style-type: none"> ・援助の流れだけでなくかかわった保健婦の動きや反応など必要、掘り下げに欠ける(1) ・事例の問題点のあげ方が保健婦室の中だけで終わっている(他のスタッフの意見等が入ってない)(1) 	3

事例検討会の問題点（件数）		件数
	・義務感から提出している感じがある(1)	
b. 会の計画	・年間の予定として計画がたてられていない(2)	2
c. 会の構成メンバー	・他事業とのからみがあり、全員出席の日がとれない(1) ・医療機関等、参加者の枠の拡大がはかれない(1)	2
d. 日程	・日程が固定されているためタイムリーな事例検討ができない(2)	2
e. 検討時間	・短時間のため検討が深められない(1) ・会に要する時間が制限される(1)	2
f. 検討の仕方	・参加者の発言、参加者同志の討論が少ない(1) ・保健婦自身のケースへのかかわりを深く見つめ直す機会が少ない(1)	2
g. 検討後のフォローと評価	・会で出された問題点、援助の方向性について実践した上で再評価する必要があるが実施できていない(1) ・検討後のケースの経緯については担当と一部（婦長を含む）の者にしかわからないことが多い(1) ・会での助言がどこまで活動に生かされたのか現状では確認できていない(1)	3

〔6〕改善すべき点、及び今後の課題についてお書き下さい

表6.

複数回答（17件）

改善すべき点、今後の課題（件数）		件数
a. 事前の準備	<ul style="list-style-type: none"> ・会で自分の意見が出せるように、疑問点、問題点、対処方法等を書くようにしてはどうかと考えている ・メンバー全員がケースを共有するために事前に所内（室）で検討会を持つ(1) 	2
b. 会の計画	<ul style="list-style-type: none"> ・事例検討会としての年間の計画が必要である(1) 	1
c. 検討形式	<ul style="list-style-type: none"> ・柔軟性のある形で“事例検討”ができないか(1) 例 ㊦ センターのアポイントメントをとったのち、ケース担当保健婦とセンタースタッフとの検討会 ㊧ センターでの事例検討会を定例化し、事例のある保健所が予約をとる 	1
d. 会の構成メンバー	<ul style="list-style-type: none"> ・保健所のチームとしての検討という点からも関係職員の参加を求める(2) ・福祉関係のみでなく、もっと広く関係者を交えた検討も必要(1) ・業務の都合で所長、予防課職員が出席できなかったときがあり、今後は、そのような事がないよう努力したい(1) 	4
e. 会の進行	<ul style="list-style-type: none"> ・進行係を決め、会をスムーズに運営する(1) 	1
f. 検討の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・そこに参加している個々が自分の思い、意見を出すよう心がけることが第一(1) ・保健婦自身の感受性をトレーニングできるような設定も必要(1) ・時間設定に余裕をもたせる(1) 	3

改善すべき点、今後の課題（件数）		件数
g. 検討後のフォローと評価	<ul style="list-style-type: none"> ・検討会後も、担当保健婦がどう受け止め、どう変容し発展していったかを記録の中にも位置づけることが大切(1) ・助言について、どこまで生かして活動をすすめ、どこまで目標にせまれたのかを確認していく場の設定(1) ・検討した中で、共有した点をそれぞれが自分のケースにも生かせるようになればと思う(1) ・検討会後、継続援助した結果を再度事例検討会へとつなげ、ケア内容の充実を図りたい 	3
h. その他	<ul style="list-style-type: none"> ・自分をゆっくりみつめる研修も必要(1) 	1

〔7〕事例検討会を通して関係職員の方々の変化はありましたか。

ある 10保健所

あまりない 1保健所

表7.

複数回答（22件）

変化した内容（件数）		件数
a. 関係職種との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・他の関係職種との共通理解ができ、各々の役割が明確になった(5) ・保健予防課と保健婦室の相互理解と協力体制が前進した(3) ・関係者と同じ方向で援助できるようになった(1) ・アルコールのケース検討会で内科主治医に出席してもらったところ、疾患の理解と保健婦業務の理解が得られた(1) ・小児科医師から小児の親（ケース）の背景について情報が得られ非常に良かった、という意見があり、情報交換が多くなった(1) ・精神障害は保健所で対応すべきとノータッチだった 	12

変化した内容（件数）		件数
	市町の福祉担当者が同伴訪問してくれるようになった(1)	
b. スタッフの力量の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・精神障害者に対する理解と、とらえ方が分かるようになってきた(3) ・保健婦自身の不安が少なくなり自信が持てるようになってきた(1) ・自分自身の考え方の傾向がわかるようになってきた(1) ・ミニカンファレンスが必要に応じてできるようになってきた(1) 	9

〔8〕 センター職員の助言について日頃感じておられる事、助言の在り方、改善してほしい点についてお書き下さい

なし 4 保健所

あり 7 保健所

表 8.

複数回答（9件）

助言についての感想、意見（件数）		件数
a. 助言者	・医師の立場からの助言は疾病理解から保健指導にまで及び修得することが大きい(2)	2
b. 助言、指導内容	<ul style="list-style-type: none"> ・援助する側の問題についても検討が深められるような助言がいただきたい(1) ・心理学的視点についても助言、指導してほしい(1) ・具体的、実践的な助言が得られる(2) ・センタースタッフ、個人の助言だけでなくセンターとしてのコメントを集約してきてもらっているのが今のままでよい(2) 	6
c. その他	・遠隔地であり、交通に時間がとられ、検討会の時間に余裕がない(1)	1

〔9〕事例検討会後のフォローやセンターへの経過の連絡について現在は個々の判断に委ねられている現状だと思いますか。その点についてのご意見をお聞かせ下さい

表9.

複数回答 (11件)

フォロー経過についての意見	件数
・ 必要時連絡をとっていけばよい	3
・ 報告の様式を作成する	3
・ 検討会後のフォロー等についてフローチャートを作成する	1
・ 検討会提出ケースは経過報告をするため全ケースを検討会で報告する	1
・ 方向性のわからなくなった継続ケースは、再検討する	1
・ 婦長に相談されることが多いので特にない	1
・ 保健所とセンターが共有できる訪問活動のためのマニュアルが作れるとよい	1

〔10〕保健所の精神保健活動について現在問題と思われることは、どんな事でしょう

表10.

複数回答 (17件)

保健所の精神保健活動についての問題 (件数)		件数
a. 活動量	・ 精神保健活動が増加し、緊急時の対応など他業務との調整が困難である(3)	3
b. 活動内容	・ 地域から持ち込まれるケースは状況の悪化した処遇困難なものが多い(3) ・ ケースへの援助に限られており予防活動、地域への理解を深めるための活動ができていない(1)	4
c. 連携	・ ケース把握の契機がシステム化されていない(医療機関との連携不十分)(2) ・ 市町村及び福祉関係が直接センターへ相談し保健所への連絡がない場合がある(1) ・ 一部市町村で事例検討会に出席してもらえないところがある(1)	4
d. 保健所内の問題	・ 業務内容により他課とのチームワークがとれない事がある(1)	2

保健所の精神保健活動についての問題（件数）	件 数
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 所内でも精神保健事業についての考え方の相違がある(1)
e. 行政的問題	<div style="text-align: right; vertical-align: top; margin-right: 10px;">4</div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各保健所により精神保健活動のレベルが異なる。県の目標が明確でないことによると考えられ、地域差が出ないように指針が必要である(1) ・ 社会復帰の為に段階的な種々の施設が必要であるが皆無に近い。足がかりを作れるような援助が必要と思われるが、理解に乏しく難しい。保健婦が個々の事例を大切に実績を作ることと並行して、行政として、もう少し上のレベルでの認識も必要ではないか。(1) ・ デイケア予算が少なく予算の範囲内ではプログラムが組めない(1) ・ アルコール相談が増加傾向にあり、専門医の相談窓口の拡充をしてほしい(1)

3. 結 果

問〔1〕～〔4〕は、各保健所での事例検討会のおおよその位置づけについてたずねた。センター職員として会に出席し、その構成メンバーについては、毎回保健所長が出席する保健所から、保健婦室のみで実施するところまで、また、各関係機関を含めて、巾広く出席のあるところから、その拡がりのないところまで、各保健所間の相違を感じてきたが、〔1〕年間の計画、〔2〕所内での記録の流れをみても、その差異の一端が伺える。

問〔5〕～〔10〕までは、自由記述式でたずねたため複数回答となっている。現状を学び合う意味からもまとめずに原文にはほぼ、近い形で挙げた。

〔5〕は、保健所の事例検討会の問題点についてたずねた。（表5）aのケース記録から、b～fの会の運営、gの検討後のフォローと評価まで巾広く問題点が挙げられた。

〔6〕は、その改善点と、今後の課題についてであるが、（表6）dの会の構成メンバーの枠の拡大についてgの検討後のフォローと評価については、各々4件ずつの課題と改善点が出されている。

〔7〕は、事例検討会を通して、関係職員の変化についてたずねた。(表7)

関係職種との連携について変化があったと答えたものが12件あり、連携の場づくりとして会が機能していることが再確認された。

〔8〕は、センター職員の助言のあり方について意見と感想を求めた。

医師の立場としての助言が疾病のみにとどまらず、保健指導までと巾広く聴けて修得するものが大きいと答えたものが2件あった。また、センターから会へ出席する際、各々の職種の視点と、センターとしての視点の両方を検討し、コメントしているが、その点についてもよいという意見が2件あった。

〔9〕は、検討後のフォローや経過について、(表9)の意見であるが、必要時連絡をとればよいというものと、報告の様式を作成するというものが各々3件ずつあった。

〔10〕は、保健所の精神保健活動で、現在問題と思われることについてたずねた。(表10)

aの活動量の問題から、bの保健所的ケースへの対応の困難さ、c、dの保健所内外でのチームワークづくりや、eの行政的課題について、現実的で切実な意見が多く挙げられている。

4. 考 察

今回のアンケート調査は、事例検討会を、主催する保健所とその技術指導援助の役割を担うセンターとの双方からの見直しを図るという目的を持っている。

従って、各保健所とセンターが各々の地域で開催されている事例検討会の現状に目を向け会のねらいや効果的運営について再検討し、その目的達成のため意識的に実施していく契機としたいと考えている。

年々、保健所業務量の増加する中での会の開催は、ともすれば負担となり、又参加意欲を低下させ、会の目的を見失いがちになる。今回の調査では、上述のような、実施上の困難さを含みながらも、開催前後の全プロセスに亘って、熱心な回答を得、多様な意見を聞くことができた。中でも、検討会を効果的に運営するために、スタッフの準備段階での課題や、構成メンバーの枠の拡大、検討後のフォローや評価について、各々の保健所できめ細かな具体策が講じられていることがわかった。

平成2年11月21日、センターの教育研修の1つとして「事例検討をめぐって」とい

うテーマでシンポジウムを開催したが、その中で出された意見を一部引用すると、

(1) 事例検討会をどうとらえているかという点について

- a. 医学的側面を勉強する場としてのとらえ方が多い。
- b. 参加者自身、“検討してもらえ場”としてのとらえ方で受身である。また、自分の役割について明確ではない。各々が、自分の中でどう生かすかという想いに欠ける。

(2) 今後のあり方について

- a. 会の目的をはっきりさせる事
- b. 受身でなく、自分の問題として事例をとらえ、ケースを共有する。
- c. 自分の意見を持って会へ参加する。
- d. センターに対して、事例のプロセスから考えてタイムリーな援助をしてほしい。

等々、保健所が、事例検討会をより主体的に位置づけていこうという積極的な意見が多くを占めた。

従来、センターの援助のあり方としても、事例のとらえ方や、対応についての具体的な助言が多かったが、アンケートでは、援助者の内面の問題にも焦点をあててほしいという意見があり、保健所のニーズに即した多様な技術提供が必要であることも認識できた。

従って、今後は、保健所各々の事例検討会に於いて、何を目的とするかによって援助方法が異なり、そのニーズに合った形でセンターが対応できることが望ましいと考える。たとえば、事例のプロセス上、タイムリーな助言が必要な時は、場所、時間、構成メンバー等を動かし、実施するなど、従来の形式から脱却した形で検討方法を考える必要がある。そのために、まず、保健所の中で、検討の目的を整理し——事例の見方についてなのか、処遇についてなのか、あるいは、援助者の内面についてなのか等々——それに即した形で事例をまとめ、検討会の構成メンバー、実施方法を考えていく。一方、センターでは、バラエティに富んだ助言ができるようセンター内研修や意見統一を図るなど体制づくりをしていかななくてはならない。

地域の精神保健活動の中核として、保健所が機能している現在、関係職種との連携の輪はますます広がり、保健所職員は、コーディネーターとしての役割が重要になるであろうと思われる。事例の個別性、各々の保健婦の視点の違いを検討する事によって、判断や援助経過を共有し合い保健婦の援助技術を向上させる事を目的としながら、同時に地域精神

保健活動に於けるコーディネーターとしての訓練の場として機能させる事が大切である。

この様な視点からも助言のあり方を再検討していく必要がある。

また、アンケートの意見の中にも挙げられていたが、当県に於いては、現在、精神保健相談や事例援助に関する方法や考え方についての基本的なマニュアルが作成されていない。事例検討の積み重ねとしては5年経過したところであるが、現場の精神保健活動と合わせたものを現在、計画中である。

IV. こころの健康センター図書目録

三重県こころの健康センター図書目録（五十音順）

番号	書名	著、編、訳、者名	出版社名
1	アリエティ分裂病入門	近藤 喬一 訳	星和書店
2	アルコール依存症	斎藤 学 共編	有斐閣
3	アルコール依存の社会病理	大橋 薫 編	星和書店
4	アルコール症 (J. フォート著)	大森 正英 訳	東京大学出版会
5	異常と正常	秋元 波留夫 著	東京大学出版会
6	遺伝精神医学	坪井 孝幸 著	金原出版
7	医療ソーシャルワーカー論	児島 美都子 著	ミネルウェア書房
8	岩波国語辞典	西尾 実 著	岩波書店
9	狼に育てられた子 (J. A. L. ジング著)	中野 善達 訳	福村出版
10	カウンセリングと人間性	河合 隼雄 著	創元社
11	カウンセリングの実際問題	河合 隼雄 著	誠信書房
12	覚醒剤中毒	山下 格 著	金剛出版
13	仮面デプレッションのすべて	筒井 木春 著	新興医学出版社
14	健康と福祉 (厚生行政百問百答)	厚生省 監修	厚生問題研究会
15	現代精神分析 1	小比木 啓吾 著	誠信書房
16	現代精神分析 2	小比木 啓吾 著	誠信書房
17	講座 家族精神医学 1	加藤 正明 共編	弘文堂
18	講座 家族精神医学 2	加藤 正明 共編	弘文堂
19	講座 家族精神医学 3	加藤 正明 共編	弘文堂
20	講座 家族精神医学 4	加藤 正明 共編	弘文堂
21	講座 日本の老人 1 老人の精神医学と心理学	金子 仁郎 共編	垣内出版
22	講座 日本の老人 2 老人の福祉と社会保障	岡村 重雄 共編	垣内出版
23	講座 日本の老人 3 老人と家族の社会学	那須 宗一 共編	垣内出版
24	行動と脳	今村 護郎 著	東京大学出版会
25	最新児童精神医学	高木 隆郎 監訳	ルガール社
26	自己と他者 (R. D. レイン著)	志貴 春彦 共訳	みすず書房
27	実務衛生行政六法61年版	厚生省 監修	新日本法規
28	児童精神衛生マニュアル	松本 和雄 共著	日本文化科学社

番号	書名	著、編、訳、者名	出版社名
29	児童の発達と行動	加藤正明 共訳	医学書院
30	死にゆく患者と家族への援助	柏木哲夫 著	医学書院
31	社会精神医学の実際 1	加藤伸勝 編	医学書院
32	社会精神医学の実際 2	佐藤亮三 編	医学書院
33	社会精神医学の実際 3	逸見武光 編	医学書院
34	社会精神医学の実際 4	加藤伸勝 編	医学書院
35	生涯各期の心身症とその周辺疾患	並木正義 編	診断と治療社
36	小児メディカルケアシリーズ 6 小児のMBD	上村菊朗 共著	医歯薬出版
37	小児メディカルケアシリーズ 7 登校拒否症	若林真一郎 著	医歯薬出版
38	小児メディカルケアシリーズ 8 小児のてんかん	福山幸夫 著	医歯薬出版
39	小児メディカルケアシリーズ 13 小児の糖尿病	田中美郷 著	医歯薬出版
40	小児メディカルケアシリーズ 14 自閉症	村田豊久 著	医歯薬出版
41	小児メディカルケアシリーズ 15 小児の心身症	河野友信 著	医歯薬出版
42	小児メディカルケアシリーズ 20 夜尿症	三好邦雄 著	医歯薬出版
43	職場の精神衛生	春原千秋 共編	医学書院
44	事例検討と看護実践	外口玉子 編	看護事例検討会
45	事例検討と患者ケアの展開	外口玉子 編	バオバブ社
46	心身の力動的発達		岩崎学術出版社
47	新精神保健法(法令、通知、資料)	厚生省 監修	中央法規出版
48	心理療法の実際	河合伴雄 編	誠信書房
49	人類遺伝入門	大倉興司 著	医学書院
50	睡眠障害	上田英雄 編	南江堂
51	睡眠障害	山口成良 共著	新興医学出版社
52	ステッドマン医学人辞典	メディカルビュー
53	増補版 精神医学辞典	加藤正明 共編	弘文堂
54	精神医学ソーシャルワーク	柏木 昭 編	岩崎学術出版社
55	精神医学と社会療法	秋元波留夫 著	医学書院
56	精神医療の実際	菱山珠夫 共編	金原出版
57	精神衛生と法的問題	高宮澄夫 共訳	牧野出版
58	精神衛生と保健活動	中澤正夫 共編	医学書院

番号	書名	著、編、訳、者名	出版社名
59	精神衛生のための100か条	中 沢 正 夫 著	創 造 出 版
60	精神衛生法詳解	公衆衛生法規研究会	中央法規出版
61	精神科のソーシャルスキル	アイリーン山口監修	協同医書出版
62	精神科のリハビリテーション	吉 川 武 彦 著	医学図書出版
63	精神科のハーフウェイハウス	加 藤 正 明 著	星 和 書 店
64	精神科 MOOK 3 寛解剤・有機溶剤中毒	加 藤 伸 勝 著	金 原 出 版
65	精神科 MOOK 4 境界例	保 崎 秀 夫 著	金 原 出 版
66	精神科 MOOK 6 思春期の危機	下 坂 幸 三 著	金 原 出 版
67	精神科 MOOK 8 老人期痴呆	長谷川 和 夫 著	金 原 出 版
68	精神疾患ケース・スタディ	森 温 理 著	医 学 書 院
69	精神疾患と心理学	神 谷 美 恵 子 著	み ず ず 書 房
70	精神障害者との出会い	加 藤 伸 勝 編	医 学 書 院
71	精神障害者のディケア	加 藤 正 明 共 編	医 学 書 院
72	精神分析用語辞典	村 上 仁 監 訳	み ず ず 書 房
73	精神分析セミナー I 精神療法の基礎	小比木 啓 吾 共編	岩崎学術出版社
74	精神分析セミナー II 精神分析の治療機序	小比木 啓 吾 共編	岩崎学術出版社
75	精神分析セミナー III フロイトの治療技法論	小比木 啓 吾 共編	岩崎学術出版社
76	精神分析セミナー IV 発達とライフサイクルの視点	小比木 啓 吾 共編	岩崎学術出版社
77	精神分裂病の治療と社会復帰	蜂 矢 英 彦 著	金 剛 出 版
78	青年期境界例の治療	成 田 善 弘 共 訳	金 剛 出 版
79	側頭葉てんかん	宇 野 正 威 著	星 和 書 店
80	チューリッヒ学派の分裂病論	人 見 一 彦 著	金 剛 出 版
81	てんかん診療の実際	福 山 幸 雄 監 訳	医 学 書 院
82	断酒学	村 田 忠 良 著	星 和 書 店
83	地域精神衛生の理論と実際	加 藤 正 明 監 修	医 学 書 院
84	日本の中高年 1 (上) 中高年健康管理学	篠 野 脩 一 編	垣 内 出 版
85	日本の中高年 1 (下) 中高年健康管理学	篠 野 脩 一 編	垣 内 出 版
86	日本の中高年 2 中高年女性学	篠 野 脩 一 編	垣 内 出 版
87	日本の中高年 3 収穫の世代	袖 井 孝 子 編	垣 内 出 版
88	日本の中高年 4 老人のプロセスと精神障害	戸 川 行 男 共 編	垣 内 出 版

番号	書名	著、編、訳、者名	出版社名
89	日本の中高年 5 中高年にみる生活危機	本村 汎 共編	垣内出版
90	日本の中高年 6 病める老人を地域でみる	前田 信雄 著	垣内出版
91	ニュー セックス セラピー	野末 源一 訳	星和書店
92	脳と心を考える	井上 英二 編	講談社
93	方法としての事例検討	外口 玉子 著	看護協会出版会
94	保健所精神衛生活動のすすめ方	岡上 和雄 共著	牧野出版
95	夫婦家族療法	鈴木 浩二 訳	誠信書房
96	ポウルビィ母子関係入門	作田 勉 訳	星和書店
97	分裂病家族の研究	井村 恒郎 著	みすず書房
98	メンタルヘルス解説辞典	大原 健志郎 編	中央法規出版
99	森田正馬全集 1	森田 正馬 著	白揚社
100	森田正馬全集 2	森田 正馬 著	白揚社
101	森田正馬全集 3	森田 正馬 著	白揚社
102	ユキの日記	笠原 嘉 編	みすず書房
103	病むということ	江畑 啓介 訳	星和書店
104	ライフサイクルからみた女性の心	石川 中 共訳	医学書院
105	臨床神経心理学	濱中 淑彦 共訳	文光堂
106	臨床体験をつなぐ事例検討	外口 玉子 編	金原出版
107	臨床てんかん学	和田 豊治 著	金原出版
108	老人心理へのアプローチ	長谷川 和夫 共著	医学書院
109	老人精神衛生活動を始める人のため	浜田 晋 著	創造出版
110	老人保健の基本と展開	松崎 俊久 編	医学書院
111	老人ぼけの理解と援助	三宅 貴夫 編	医学書院
112	老年期の精神科臨床	室伏 君士 著	金剛出版
113	老年期の精神障害	長谷川 和夫 著	新興医学出版社
114	老年の精神医学	加藤 伸勝 監訳	医学書院

63年度以降購入分

番号	書名	著、編、訳、者名	出版社名
1	現代精神医学大系 1 A 精神医学総論 I		中山書店
2	現代精神医学大系 1 B 1 a 精神医学総論 II a 1		中山書店
3	現代精神医学大系 1 B 1 b 精神医学総論 II a 2		中山書店
4	現代精神医学大系 1 B 2 精神医学総論 II b		中山書店
5	現代精神医学大系 1 C 精神医学総論 III		中山書店
6	現代精神医学大系 2 A 精神疾患の成因 I		中山書店
7	現代精神医学大系 2 B 精神疾患の成因 II		中山書店
8	現代精神医学大系 2 C 精神疾患の成因 III		中山書店
9	現代精神医学大系 3 A 精神症状学 I		中山書店
10	現代精神医学大系 3 B 精神症状学 II		中山書店
11	現代精神医学大系 4 A 1 精神科診断学 I a		中山書店
12	現代精神医学大系 4 A 2 精神科診断学 I b		中山書店
13	現代精神医学大系 4 B 精神科診断学 II		中山書店
14	現代精神医学大系 5 A 精神科治療学 I		中山書店
15	現代精神医学大系 5 B 精神科治療学 II		中山書店
16	現代精神医学大系 5 C 精神科治療学 III		中山書店
17	現代精神医学大系 6 A 精神症と心因反応 I		中山書店
18	現代精神医学大系 6 B 精神症と心因反応 II		中山書店
19	現代精神医学大系 8 人格異常、性的異常		中山書店
20	現代精神医学大系 9 A 躁うつ病 I		中山書店
21	現代精神医学大系 9 B 躁うつ病 II		中山書店
22	現代精神医学大系 10 A 1 精神分裂病 I a		中山書店
23	現代精神医学大系 10 A 2 精神分裂病 I b		中山書店
24	現代精神医学大系 10 B 精神分裂病 II		中山書店
25	現代精神医学大系 12 境界例、非定型精神病		中山書店
26	現代精神医学大系 15 A 薬物依存と中毒 I		中山書店
27	現代精神医学大系 15 B 薬物依存と中毒 II		中山書店
28	現代精神医学大系 18 老年精神医学		中山書店
29	現代精神医学大系 23 A 社会精神医学と精神衛生 I		中山書店
30	現代精神医学大系 23 B 社会精神医学と精神衛生 II		中山書店

番号	書名	著、編、訳、者名	出版社名
31	現代精神医学大系 23C 社会精神医学と精神衛生Ⅲ		中山書店
32	現代精神医学大系 24 司法精神医学		中山書店
33	現代精神医学大系 25 文化と精神医学		中山書店
34	フロイド著作集1巻、精神分析入門(正統)	懸田克躬・高橋義孝訳	人文書院
35	フロイド著作集2巻、夢判断	高橋義孝訳	人文書院
36	フロイド著作集3巻、文化・芸術論	高橋義孝他訳	人文書院
37	フロイド著作集4巻、日常生活の精神病理学他	懸田克躬他訳	人文書院
38	フロイド著作集5巻、性欲論・症例研究	懸田克躬・高橋義孝他訳	人文書院
39	フロイド著作集6巻、自我論・不安本能論	井村恒郎・小比木啓吾他訳	人文書院
40	フロイド著作集7巻、ヒステリー研究他	懸田克躬・小比木啓吾他訳	人文書院
41	フロイド著作集8巻、書簡集	生松敬三他訳	人文書院
42	フロイド著作集9巻、技法・症例篇	小比木啓吾訳	人文書院
43	フロイド著作集10巻、文学・思想篇Ⅰ	高橋義孝・生松敬三他訳	人文書院
44	フロイド著作集11巻、文学・思想篇Ⅱ	高橋義孝・生松敬三他訳	人文書院
45	臨床脳波学	大熊輝雄	医学書院
46	クレベリンの精神医学1巻 精神分裂病	西丸四方・西方甫夫訳	みすず書房
47	クレベリンの精神医学2巻 躁うつ病とてんかん	西丸四方・西方甫夫訳	みすず書房
48	クレベリンの精神医学3巻 心因性疾患とヒステリー	遠藤みどり訳	みすず書房
49	遠藤四郎睡眠研究論集	遠藤四郎	星和書店
50	分裂病の身体療法	宇野昌人他訳	星和書店
51	躁うつ病の精神病理全 1	笠原嘉編	弘文堂
52	躁うつ病の精神病理全 2	宮本忠雄編	弘文堂
53	躁うつ病の精神病理全 3	飯田真編	弘文堂
54	躁うつ病の精神病理全 4	木村敏編	弘文堂
55	躁うつ病の精神病理全 5	笠原嘉編	弘文堂
56	精神遅滞児の医療・教育・福祉	櫻井芳郎他訳	岩崎学術出版社
57	岩波講座、子どもの発達と教育1、子どもの発達と現代社会		岩波書店
58	岩波講座、子どもの発達と教育3、発達と教育の基礎理論		岩波書店
59	岩波講座、子どもの発達と教育7、発達の保障と教育		岩波書店
60	分裂病の精神病理4	萩野恒一編	東京大学出版会

番号	書名	著、編、訳、者名	出版社名
61	青年の精神病理 1	笠原嘉・清水将之・伊藤克彦編	弘文堂
62	青年の精神病理 2	小比木 啓 吾 編	弘文堂
63	青年の精神病理 3	清水将之・村上靖彦編	弘文堂
64	講座 生活ストレスを考える 1. 生活ストレスとは何か	石原邦雄・山本和郎・坂本弘編	垣内出版
65	講座 生活ストレスを考える 2. 生活環境とストレス	山本和郎 編	垣内出版
66	講座 生活ストレスを考える 3. 家族生活とストレス	石原邦雄 編	垣内出版
67	講座 生活ストレスを考える 4. 職場集団にみるストレス	坂本 弘 編	垣内出版
68	講座 生活ストレスを考える 5. 学校社会のストレス	安藤延男 編	垣内出版
69	メラニー・クライン著作集1. 子どもの心的発達	責任編訳・西川久・牛島定信著	誠信書房
70	メラニー・クライン著作集3. 愛、別そして恨み	責任編訳・西川久・牛島定信著	誠信書房
71	メラニー・クライン著作集4. 妄想的・分裂的世界	責任編訳・小比木啓吾・岩崎徹也	誠信書房
72	メラニー・クライン著作集6. 児童分析の記録I	山上千鶴子 訳	誠信書房
73	アルコール薬物依存	大原健士・田所作太郎編	金原出版株式会社
74	無意識の発見 上	アンナ・エレンベルガー著・林登・中沢久編訳	弘文堂
75	無意識の発見 下	アンナ・エレンベルガー著・林登・中沢久編訳	弘文堂
76	新しい子ども学 3巻 1育つ	小林登・小嶋謙四郎他著	海鳴社
77	新しい子ども学 3巻 2育てる	〃	〃
78	新しい子ども学 3巻 3子どもとは	〃	〃
79	アンナ・フロイド著作集 1 児童分析入門	岩村由美子・中沢たえ子訳	岩崎学術出版社
80	アンナ・フロイド著作集 2 自我と防衛機制	黒丸正四郎・中野良平訳	岩崎学術出版社
81	アンナ・フロイド著作集 3 家庭なき幼児たち・上	中沢たえ子 訳	岩崎学術出版社
82	アンナ・フロイド著作集 4 家庭なき幼児たち・下	中沢たえ子 訳	岩崎学術出版社
83	アンナ・フロイド著作集 5 児童分析の指針上	黒丸正四郎・中野良平訳	岩崎学術出版社
84	アンナ・フロイド著作集 6 児童分析の指針下	黒丸正四郎・中野良平訳	岩崎学術出版社
85	アンナ・フロイド著作集 7 ハムステッドにおける研究・上	牧田清志・坂本良男・見玉恵美訳	岩崎学術出版社
86	アンナ・フロイド著作集 8 ハムステッドにおける研究・下	牧田清志・坂本良男・見玉恵美訳	岩崎学術出版社
87	アンナ・フロイド著作集 9 児童期の正常と異常	黒丸正四郎・中野良平訳	岩崎学術出版社
88	アンナ・フロイド著作集 10 児童分析の訓練	佐藤紀子・岩崎徹也・辻律子訳	岩崎学術出版社
89	講座、精神の科学 2 パーソナリティ		岩波書店
90	異常心理学講座4巻 1 学派と方法	日村健郎・笠原嘉・坂本弘編・責任編訳	みすず書房

番号	書名	著、編、訳、者名	出版社名
91	異常心理学講座 3 人間の生涯と心理	土居健郎・笠原弘・宮本忠雄・貞田隆典	みすず書房
92	異常心理学講座 4 神経症と精神病1	土居健郎・笠原弘・宮本忠雄・貞田隆典	みすず書房
93	異常心理学講座 5 神経症と精神病2	土居健郎・笠原弘・宮本忠雄・貞田隆典	みすず書房
94	井村恒郎著作集 1 精神病理学研究	井村恒郎 著	みすず書房
95	井村恒郎著作集 2 脳病理学・神経症	〃	みすず書房
96	井村恒郎著作集 3 分裂病・家族の研究	〃	みすず書房
97	新しい精神医学	高橋良・秦弘 監修	ヘスインターナショナル
98	老年の心理と精神医学	金子仁郎 著	金剛出版
99	叢書・精神の科学 1 卷精神の幾何学	安永 浩 著	岩波書店
100	叢書・精神の科学 2 卷シンファンの病い	小出 浩之 著	岩波書店
101	叢書・精神の科学 4 治療の場からみた分裂病	坂本 暢典 著	岩波書店
102	叢書・精神の科学 5 正気の発見	内沼 幸雄 著	岩波書店
103	叢書・精神の科学 6 心身症と心身医学	成田 善弘 著	岩波書店
104	叢書・精神の科学 7 意識障害の人間学	河合 逸雄 著	岩波書店
105	叢書・精神の科学 8 境界事象と精神医学	鈴木 茂 著	岩波書店
106	叢書・精神の科学 10 精神と身体	遠藤 みどり 著	岩波書店
107	叢書・精神の科学 11 脳と言語	野上 芳美 著	岩波書店
108	叢書・精神の科学 12 貧困の精神病理	大平 健 著	岩波書店
109	叢書・精神の科学 13 「非行」が語る親子関係	佐々木譲・石附敦著	岩波書店
110	井村恒郎・人と学問	懸田 克射 編	みすず書房
111	人間性心理学への道（現象学からの提言）	村上 英治 編	誠信書房
112	生きること かかわること	村上 英治 監修	名古屋大学出版会
113	人格の対象関係論（フェッペーン著）	山口 泰司 訳	文化書房博文社
114	臨床的对象関係論（フェッペーン著）	山口泰司・原田千恵子訳	文化書房博文社
115	性的例錯（メダルト・ボス著）	村上仁・吉田和夫訳	みすず書房
116	性の逸脱（ストー著）	山口 泰司 訳	理想社
117	子どもの治療相談①通比障害・学業不振・神経症	ウイニエット著・橋本雅雄訳	岩崎学術出版社
118	子どもの治療相談②反社会的傾向・盗みと愛情剥夺	ウイニエット著・橋本雅雄訳	岩崎学術出版社
119	描画による心の診断	岩井 寛 著	日本文化科学社
120	家族療法（ジェイ・ヘイリィ著）	佐藤 悦子 訳	川島書店

番号	書名	著、編、訳、者名	出版社名
121	夫婦家族療法Ⅰ (Dグリック D・Rケスラー著)	鈴木浩二訳	誠信書房
122	集団精神療法の理論と実際	池田由子著	医学書院
123	心理面接の技術	前田重治著	慶応通信
124	コミュニティ心理学	山本和郎著	東京大学出版会
125	日本の精神障害者	岡上和雄・大島巖・荒井元博編	ミネルウヰ書房
126	日常性の精神医学 (ヴァン・デン・ベルグ著)	早坂泰次郎・矢崎好子訳	川島書店
127	表情病	阿部正著	誠信書房
128	現代精神医学の概念 (サリヴァン著)	中井久夫・山口隆訳	みすず書房
129	精神医学直面接 (サリヴァン著)	中井久夫・山口隆訳	みすず書房
130	発想の航跡	神田橋條治	岩崎学術出版社
131	身体の心理学 (P・シルダー著)	稲永和豊監修	早和書店
132	岩波心理学小辞典	宮城音弥編	岩波書店
133	精神病棟の20年	松本昭夫著	新潮社
134	精神障害・薄弱百問百答	児島美都子監修	中央法規出版
135	アメリカの精神医療	仙波恒雄監訳・解説	星和書店
136	新精神保健法	厚生省保健医療局精神保健課監修	中央法規出版
137	適正飲酒ガイドブック		アルコール健康医学協会
138	痴呆老人対策	痴呆性老人対策推進部事務局編	中央法規出版
139	ほけ老人の家庭介護手引き		厚生環境問題研究会
140	だれでも精神科治療	小池清廉著	ルガール社
141	日本人の深層分析1 母親の深層	馬場謙一・小川捷之他編	有斐閣
142	日本人の深層分析2 父親の深層	馬場謙一・小川捷之他編	有斐閣
143	日本人の深層分析3 エロスの深層	馬場謙一・小川捷之他編	有斐閣
144	日本人の深層分析4 攻撃性の深層	馬場謙一・小川捷之他編	有斐閣
145	日本人の深層分析5 夢と象徴の深層	馬場謙一・小川捷之他編	有斐閣
146	日本人の深層分析6 創造性の深層	馬場謙一・小川捷之他編	有斐閣
147	日本人の深層分析7 病める心の深層	馬場謙一・小川捷之他編	有斐閣
148	日本人の深層分析9 子どもの深層	馬場謙一・小川捷之他編	有斐閣
149	日本人の深層分析10 青年期の深層	馬場謙一・小川捷之他編	有斐閣
150	日本人の深層分析11 老いとるもの深層	馬場謙一・小川捷之他編	有斐閣

番号	書名	著、編、訳、者名	出版社名
151	思春期の対象関係論	牛島定信	金剛出版
152	痴呆老人の理解とケア	室伏君士	金剛出版
153	薬物依存	加藤雄司	金剛出版
154	分裂病者の行動特性	尾田源四郎	金剛出版
155	老年期精神障害の臨床	室伏君士編	金剛出版
156	E.ミンコフスキー 生きられる時間 1	中江育生・清水誠 訳	みすず書房
157	E.ミンコフスキー 生きられる時間 2	中江育生・清水誠・大橋博司訳	みすず書房
158	E.ミンコフスキー 精神分裂病	村上仁 訳	みすず書房
159	異常心理学講座 第9巻	土池敏・三浦隆・宮本謙・林敏彦編	みすず書房
160	Eクレペリン <精神医学>2 躁うつ病とてんかん	西丸四方・西丸甫夫訳	みすず書房
161	精神科看護とデイ・ケア	加藤政子・松元信子訳	医学書院
162	精神科看護の展開	外間邦江・外口玉子訳	医学書院
163	精神科看護と福祉	加藤政子・松元信子訳	医学書院
164	病院精神医療の展開	監修 加藤伸勝	医学書院
165	P.S.Powers, R.C.Fernandez 神経性食慾不振症過食症の治療	監訳 保崎秀夫・高木源一郎	医学書院
166	R.K.コーニン編 ハンドブックグループワーク	馬場禮子 監訳	岩崎学術出版社
167	精神分析を語る	西園昌久	岩崎学術出版社
168	精神医学図書総覧	小林司 編	岩崎学術出版社
169	ウォン教授の集団精神療法セミナー グループリーダーのあり方	秋山剛訳	日本薬師精神療法学会第2回ウォン教授集団精神療法セミナー実行委員会発売、星和書店
170	ウォン教授の集団精神療法セミナー	山口隆・松原太郎監修	日本薬師精神療法学会 発売、星和書店
171	精神医療における芸術療法	徳田良仁・式場聡	牧野出版
172	マルコム・レコーダー 裁かれる精神医学	秋元波留夫・大木善和	創造出版
173	D.W.ウィニコット 子どもと家庭	牛島定信 監訳	誠信書房
174	医心理学	細藤一・小貫・藤沢千寿・其田夫	朝倉書店
175	心の病気と現代	秋元波留夫	東京大学出版会
176	精神障害者の社会復帰	寺谷隆子 編	中央法規出版
177	ストレス診療ハンドブック	河野友信・吾郷晋浩	メディカルサイエンス インターナショナル
178	生活と福祉 別冊事例集 アルコール依存症 および精神障害特集		全国社会福祉協議会
179	バトグラフィ双書3 宮沢賢治	福島章	金剛出版

番号	書名	著者又は訳者	出版社名
180	バトグラフィ双書6 ドフトエフスキー	萩野恒一	金剛出版
181	バトグラフィ双書8 ヘミングウェイ	伊藤高麗夫	〃
182	バトグラフィ双書9 志賀直哉	鹿野達男	〃
183	バトグラフィ双書10 川端康成	稲村博	〃
184	バトグラフィ双書12 高村光太郎	町沢静夫	〃
185	精神科MOOK 2 家族精神医学	編集企画 西園 昌久	金原出版
186	〃 5 アルコール関連障害	〃 加藤 正明	〃
187	〃 9 精神分裂病の治療と予後	〃 山下 格	〃
188	〃 11 身体疾患と精神障害	〃 原田 憲一	〃
189	〃 12 対人恐怖症	〃 高橋 徹	〃
190	〃 13 躁うつ病の治療と予後	〃 更井 啓介	〃
191	〃 14 青少年の社会後理	〃 藤原 豪	〃
192	〃 15 精神療法の実際	〃 吉松 和哉	〃
193	〃 16 自殺	〃 春原 千秋	〃
194	〃 17 法と精神医療	〃 逸見 武光	〃
195	〃 18 家庭と学校の精神衛生	〃 山田 通夫	〃
196	〃 19 森田療法—理論と実際	〃 大原健士郎	〃
197	〃 20 精神科救急医療	〃 山崎 敏雄	〃
198	〃 21 睡眠の病態	〃 菱川 泰夫	〃
199	ヤスバース精神病理学研究	藤森 英之 訳	みすず書房
200	アルコール依存症の精神病理	斎藤 学	金剛出版
201	精神分析治療の進歩	西園 昌久	〃
202	非行の病理と治療	石川 義博	〃
203	家庭内暴力	若林慎一郎・本城秀次	〃
204	性的異常の臨床	高橋進・柏瀬宏隆 編	〃
205	分裂病と構造	小出 浩之	〃
206	心理臨床家の目指すもの	台和・新田健一・長谷川隆一郎	〃
207	CM アンダーソン・DJ レイス・GE ハグティ 著 治療と家庭	鈴木浩二・鈴木和子監訳	〃
208	精神分裂治療の展開	西園 昌久	〃
209	DSM-III-R 精神障害の分類と診断の手引き第2版	高橋三郎・花田耕一・藤純昭	医学書院

定期刊行物

精神医学	医学書院
社会精神医学	星和書店
アルコール医療研究	〃
集団精神療法	日本集団精神療法学会
ソーシャル・ワーク研究	相川書房
季刊精神療法	金剛出版
季刊ゆうゆう	明文社
週刊保健衛生ニュース	社会保険実務研究所
精神医療	悠久書房
The American Journal of Psychiatry	Official Journal of the American Psychiatric Association
児童・青年精神医学とその近接領域	日本児童青年精神医学会
老年精神医学雑誌	ワールドプランニング
心理学評論	心理学評論刊行会
季刊職リハネットワーク	日本障害者雇用促進協会
IYDP 情報	日本障害者リハビリテーション協会
ぜんかれん	全国精神障害者家族会連合会
BOX-916	ボックス 916

ビデオテープ

マイクロカウンセリングⅠ 基本のかかわり技法	前編
〃 Ⅱ 〃	後編
老人ボケを防ぐには	
社会人としての言葉使いの基本	
作業療法 生活を拓ける治療と援助	
老人と飲酒	
アルコールと循環器	
肝臓とアルコール代謝	
あと一杯が飲めるか	
与越市つくしの里の実践から	
地域ぐるみでおこなわれている社会復帰活動を紹介する	
こころの病をかかえて——精神障害者は今	
病院を出て街で働きたい 報道特集(1987年)	
君は空の青さを知っているか——精神障害者が地域で生きていくために	

平成元年度版 三重県こころの健康センター所報

平成 3 年 1 月 発 行

三重県こころの健康センター
(三重県精神保健センター)

〒514-11 久居市明神町 2601-1
三重県久居庁舎 1 階
電話 05925-5-2151
